

琉球の方言 2巻 : 奄美大島宇検村湯湾方言

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

1976-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012853>

2. 語彙

語彙その1. 名詞語彙

(1) 人体関係の語彙

体の部分に関する語彙

頭

tsĩburu (頭) kamatsĩ, kamatʃi ともいう。昔は tsĩburu をよく使ったが、現在では kamatʃi をよく使う。

kamatʃinu ʔitʃasa (頭が痛い) kama
tʃinu jadĩ ともいう。kamatsĩga i: (頭
がよい) kamatʃi siki (頭の髪をとかす)
kamatsĩ kʔi: (髪を刈る)

kamatʃinu Funĩ (頭蓋骨) 「あたまの骨」
という表現。

kamatʃinu tʃʔidʒi (脳天) 「あたまの頂」
という表現。

kamatʃin ki: (頭髪) 「あたまの毛」という
表現。

ʃijagi (白髪) nukigĩ (抜け毛)

maɠguja (ちぢれ毛) 男女を問わない。

maɠgujagamatʃi (ちぢれ毛の頭)

dampatsĩ (断髪・散髪) 整髪すること一般
をいう。髪を分けるときには warĩdampatsĩ
という。

matʃidʒi (つむじ)

tʔa:tsĩ matʃidʒi (二つ巻き) tʔa:tsĩ
matʃidʒija daitan (二つ巻きは大胆者が
多い)

maki (つむじ) ともいう。çidʒai maki
(左巻き)

hagi gamatʃi (禿げ頭) hagi tsĩburu と
もいう。

gunuFuku (ひよめき) 赤坊の脳天でピクピ
ク脈動している部分。

gunuFukunu ʔigukjun (ひよめきが動く)
çidʒuruki ともいう。これは沖縄のフルチ
に対応する語。

ʃirakumo (しらくも)

ʔikki (ふけ) 魚のうろこと同じ表現。

no:miso (脳味噌) 共通語からの移入語。

顔

tsĩra (顔) 顔面全体をいう。頬も含む。

tsĩrantuʃi (頬骨)

mẽ:Futʃẽ: (額) 「前額」という表現。

mẽ:Futʃẽ:nu ta:sa (額が高い)

maki (眉間) 牛などを屠殺するときに、

maki ʔutʃi (眉間を打つ) という。

ʃiwa (しわ)

ʔumuçidʒa (面のしわ)

ware:kʔubun (笑くぼ) 「笑い窪み」という
表現。

kumiʃkan (こめかみ)

mintʃabukuru: (おたふく)

mitsĩtu: (頬かむり) min は「耳」,

tsĩtu: は「包む」で、「耳を包む」という
表現をとっている。「包む」の終止形は tsĩ
mmjun と tsĩmmjui の両形である。

maju (眉)

majugi (眉毛)

migabu (眉の高くなっている部分)

mĩmatsĩgi (まつげ)

mĩmatsĩgiĩnu nagasa (まつげが長い)

mī:(目)

mīntama(黒目)

tʃʔuggwa:(瞳) tʃʔuは「人」, gwɛ:
は指小辞で、目の中に写る人影からの命名で
ある。

goro:dgammī:(大きい目)

ʔinjamī:(細い目)

mīdgi:(目の縁の総称)「目尻」に対応する
語と思われるが、目頭も含み、目の縁全体をさ
すようになったのであろう。

mīdgi: haga:(目の縁が眼病で赤くただ
れた人) haga: は「禿げた者」の意。さら
に重病だと mīʃuppa: という。

mīʔuta(まぶた)「目蓋」という表現をとり、
沖縄方言や八重山方言の「目の皮」という表
現と異なっている。mī:ʔko:ともいう。

mīʔutānu kubudī(目がくぼんでいる)
「一重まぶた」は ko:mī:という。これは
「皮目」という表現である。

「二重まぶた」は tʃʔe: mī:という。これは
「二目」という表現をとっている。

mībutsī:(目がはれぼったい状態)

tarimī(たれ目)共通語からの移入語。

katamikko:(片目) mikko: は「盲」の意。

mīʃuppa:(眼病の一種)目の縁が真赤にただ
れる。トラホームなどからもなる。

toraho: mī(トラホーム) ムが「目」と解
されて mīになっている。

santukimī:(鳥目)

tuimī:(やぶにらみ) トリメという表現で
あるが、「やぶにらみ」の意味に転じている。
「鳥目」のことは santukimī: という。ト
リメが「やぶにらみ」をあらわすのは沖縄奥
武方言でもみられる。

tʃikjamī(近眼) tsikjamī:ともいう。

ʔiburē:(ものもらい)

ʔiburē:nu ʔidgitī(ものもらいが出る)

mikko:(盲) 最近では mīkura: という。

nada(涙)

mīʃkusu(目やに)

mīʔutʃi(まばたき)「目打ち」という表現。

mīʔutsiともいう。

mīʔutsi ʃun(まばたく)

mīmai(めまい)

mīkakufi(めかくし)

mīntsi:(目に入ったごみ)

hana(鼻)

hananu ta:sa(鼻が高い)

hananu tsīmati(鼻がつまって)

hana kʔudgitī(鼻をほじる)

ʃiʃibana(猪鼻)匂いをかぎ分けることがで
きる良い鼻。猪が良く匂いをかぎ分けること
ができるところからの命名である。

猪は ʃiʃi という。共通語の獅子鼻とは別語。

ʃippiribana:(低鼻・鼻ぺちゃ)

hanansaki(鼻の先)

hanammī:(鼻の穴) mī: は「目」で小
穴一般を指す。

hanammī: nu xī:sa(鼻の穴が大きい)

hanagi(鼻毛)

hanagīnu nagasa(鼻毛が長い)

hanagī nīgī(鼻毛を抜ける)

hanamīdzī(鼻水)

hanadai(青鼻)「鼻たれ」という表現。

hanadgi(鼻血)

hanadginu ʔidgitī(鼻血が出る)

hanagkusu(鼻くそ)

hanagkusu turī(鼻くそを取れる)

kabafa(良いにおい)

kusasa(悪いにおい)

kada (匂)「悪いにおい」も「良いにおい」
もいう。動詞として kadafi: , kadafui ,
kadafun がある。

nī: ki (いびき)「寢息」という表現。

「寢息」そのものをあらわすことばはない。

mini: (耳) min ともいう。

mini: k²udgiti (耳をほじくる)

minnu ?itfasa: (耳がいたい)

nubusiti minnu sa:sa si (のぼせて耳

鳴りがする)

minnu tu:sa (耳が遠い)

minnukusu (耳くそ)

minnukusu turī (耳くそを取れ)

mindari (耳だれ)

mintabu (耳たぶ)

miḡko: (つんぼ)

kut_ofi (口)

?uisiba (上唇)

fasiba (下唇)

上下唇の総称はない。siba は「舌」の意。

ḡigī (髯)

?waḡigī (口髯)「上ひげ」という表現。

faḡigī (顎髯)「下ひげ」という表現。

faḡigī nubafi (顎髯をのぼせ)

?junfa (啞)

?junfa: natī (啞になって)

?igjanī (どもり)

?igjanī natī (どもりになって)

?igjanī fun (どもる)

mitsigut_ofi (兔唇)

tsīzī (唾)

tsīziba hatfi (唾を吐く)

judarī (よだれ)

judarī takkjabui (よだれをたらす)

takkjabui は「吐く」の意。

judaribo: (よだれをたらしている子供)

kasigui (痰)

fiba, siba (舌)

fibaba kadi (舌をかむ)

ha: (歯)庖丁や鋸などの刃にもいう。

ha: nu jadi (歯がいたい)

ha: nu wuriti (歯が欠ける)「折れる」
という表現。

nu: ginha: (鋸の刃)

mē: ba (前歯)

?ukuba (奥歯)

k²i: ba (犬歯)「牙」のこと。動物一般も同表現。

?adaruba: (八重歯)

wagut_ofi: (出っ歯)

wamba (歯並からはずれて生えた歯)

mufiba (虫歯)

hafifi (歯茎)

haḡkusu (歯くそ)

?iki (息)

?iki fun (息をする)

kui (声)

kui ?idḡafi (声を出す)

kui kut_ofin kikjaran (音信も聞こえない)

「音信」には kui kut_ofi という。

沖縄では ki: (声)だけで「音信」の意をあらわす。

xī: saḡkui (大声)

hanampo: (鼻声) hanampo: jumita と

いう。「鼻にかかったことば」という表現。

jumant_ofu (無口の人)

?ifo: biki (口笛)

?ifo: biki fun (口笛をふく)

?akubi (あくび)

tantsiki (咳) 最近は feki ともいう。

tantsikjun (咳をする)
 tantsikuba (咳をするから)
 tantsikuna (咳をするな)
 sakurabi (げっぷ)
 ʔufugutʃi (陰口) 「後口」 という表現。
 ʔufugutʃi ʔitʃui (陰口を言っている。
 陰口をたたいている)
 warukutʃi (悪口)
 warukutʃibe : ʔju : na (悪口ばかりを言
 うな)
 ʔagu (顎)
 ʔagunu hadziriti (顎がはずれる)
 ʔutugë : (おとがい・顎先)
 ʔwaʔagu (上顎)

首
 kʔubi (首)
 kʔubinu nagasa (首が長い)
 kʔubinu ma : ran (首がまわらない・身
 動きできない)
 kʔubisidzĩ (首筋)
 gunuFuku (うなじ)
 nudu (喉)
 nudunu kawatʃi (喉がかわいている)
 tsʔurugi (喉仏) nudui tsʔurugi と
 もいう。
 nududzĩru (喉彦)
 nuduidzĩru (喉・食道)
 tʃimami (けんよう垂の病気) けんよう垂
 がたれさがって来る。

肩
 kata (肩) とくに肩の先の骨の部分をいう。
 ʃiki (けんびき)
 ʃikinu ʔidgi (肩がこる) 「シキが出て」

と表現する。
 xirabuni (かいがら骨)
 手
 ti : (手)
 ʔudi (腕) 老人の中には後膊だけをいう者
 がある。カイナという表現はない。
 tinçija (手の平)
 tikubi (手首)
 tidga (手首の曲る部分)
 cidgi (肘)
 tikko : (こぶし)
 tikko : tsikjun (こぶしを突く)
 ʔujubi (指)
 ʔujubi magitai sũtʃai (指を曲げたり
 のばしたりする)
 ʔujubĩnu saki (指先)
 ʔujubĩnu mata (指と指の間)
 ʔujubĩnu mutu (指の根元)
 Fu : ʔujubi (親指) 「大指」という表現。
 tʃʔusafi ʔujubi (人差指) tʃʔusafi :
 ともいう。
 na : ʔujubi (中指)
 nanafi ʔujubi (薬指) nanafi : と
 もいう。
 kujubi (小指)
 ʔaja (指紋) tin ʔaja とともいう。
 tsimi (爪)
 tsimĩnu hagari : n (爪がはがれる)
 tsimi kʔi : (爪を切る) ツメルは用い
 ない。
 tsimamu : ru : (爪の中が膿むこと)
 tsimĩgkusu (爪垢)
 cidzaidikko : (左きき)

胴

waki (脇)

waki kusasa (脇がくさい)

wakibara (脇腹)

wakibaranu ʔitʃasa (脇腹が痛い)

wakigī (脇毛) wakiçigī ともいう。古

くは wakikugī ともいった。

munī (胸)

munīnu ʔitʃasa (胸が痛い)

so: kubunī (肋骨)

munīçigī (胸毛)

tʃʔi: (乳・乳房) 最近は tʃʔibusa (乳房を移入している)。

tʃʔi: numafi (乳をのます)

tʃʔinu kʔutʃi (乳首)

munīʔutufi (みずおち)

munī jan (胃がいれんで病む)

wata (腹) wata: ともいう。

wata jan (腹痛)

watanu ʃitʃi (腹がすく)

wata ʔippai (腹いっぱい) tsīmai kamī ともいう。

nʔa:ra wata: (五分ほど食った腹) 満腹になっていない腹。

Fusu (臍)

Fusu tsīgi (臍の緒を切る) tsīgi は「継ぐ」で、「切る」の忌詞。

Fusun wu: (臍の緒)

Fu: busu (出臍)「大臍」という表現。

kufi (背中全体の称) 共通語のコシより意味領域が広い。「背骨」は kufibunī とも、nagambunī ともいう。ナガンは単独では用いない。

kufi magaja: (せむし)「背中の曲った者」という表現。沖縄のコーグーは用いない。

gamaku (腰のくびれた部分)

gamakunu ʔutʃi tsikati (腰がくびれて細くなる) 腹がすいて腹と背がくっついている状態をいう。

kajabunī (坐骨)

kugī (陰毛)

kʔintama (睾丸)

mara (陰茎と睾丸の総称)

maran so: (陰茎)

çi: (陰門)

mai (尻)

mai buni (尾骶骨)

mai は「尻」の全体の称で、沖縄北部瀬底島でも用いられる。沖縄南部では「尻」はチビと言い、マイは「肛門」の意に転訛している。

watado: saku (内臓全体の称) 魚などは wata という。wata ʔidʒafi (魚の内臓物を出せ)

mamī: (心臓)

Fu: gē: wata (胃袋) 最近は胃のことを ʔi: という。

magui wata (腸)

mīdzī wada (腎臓)

Fukurī wada (腎臓病)「ふくれる腹」という表現。

kʔimu (肝・肝臓) 肝は「心」の意味にひろがっている。kʔimunu jadi (心がいたむ)。ただし、「心が広い」は ku: runu çirusa のように、ku: ru を用い、kʔimu は用いない。

mune: (肝臓病)

kʔi: wada (黄胆)

Fuku: (肺臓)

midzīgūn (膀胱炎)

脚

matabasī (股)

matagī: (股にわかれていた木)

mumutabura (腿) 足の膝より上の部分。

hagi (足) 古語の「はぎ」は「膝より下でく
るぶしより上の部分」をいうが、hagi は腿
から爪先までの全体をいう。

tsībūfi (膝)

tsībūfinu sara (膝小僧)

karasīni (脛) kubura (こむら) と対を
なしているかたい骨の部分。

kubura (こむら)

hagin k²ubi (足首)

?wa: bija: (足の甲) 「上へら」という表現。

?adu (踵)

hagin saki (爪先) 「足の先」という表現。
共通語では「爪先」といえば「足の爪の先」
だけを指し、手の爪は含まれていない。

fabija: (足の裏) 「土ふまず」を含む足の
裏全体の称。bija: は「へら」に対応する
語。

k²ummī (足跡)

体の全体に関する語彙

xīguru (垢) 「へぐろ」に対応する語で、
意味は「垢・よごれ」をあらわす。

xīguru ?utusī (垢をおとす)

?asi (汗)

?asīdarako: (汗かき)

?asibu (あせも)

kumugja: (あばた・あばたをもった者)

kawamī (あぶらみ) 脂のついている部分

の肉。普通、皮が付いているところから、
「皮身」という表現をとったと思われる。

n²jutfi (命)

kutsibī (疣)

hadziki (いれずみ) 古くは女性が「いれ
ずみ」を手にほどこすことが普通であった。

?ajahadziki (美しいいれずみ) ?aja
(綾) は、「おもろ」などに多用されている
美称辞と同じもの。

?ugkju (膿)

?ugkju ?idzafi (膿を出す)

kasapko: (かさぶた) 「かさの皮」という
表現。

kadzeçiki (風邪)

figgei (片足とび)

du: (体)

du: k²jo: tji (体をこわす)

ko: (皮)

tsigē: (関節)

tsigē: nu hadzīrī (関節がはずれる)

k²idzī (傷)

jatfu: (炙)

jatfu: jaki (炙をすえる)

mafifi (筋肉質の肉)

?appē: (具合)

?appē: warusa (具合が悪い)

kusui (薬)

kusui nun (薬を飲む) mīgusui (目薬)

kusu (糞・大便)

kusu mai (糞をする)

mai は古語の「まる」に対応する語。

s²ikitsikī (けいれん・ひきつけ)

sīdzī (血管) t²fi: sīdzī ともいう。

kudafi (下痢) watakudafi ともいう。

t²finīgabu (こぶ) 頭などをぶつけて出来

るこぶは、ʔutʃiFukuraʃi という。

tattʃai ʔi: (しゃがむこと) 尻を地につけないで坐ること。

ʃibai (小便)

ʃibai ʃi: (小便をする) 小便をマルという表現はない。

sɪdzɪ (筋)

sɪdzɪnu tʃʔigatɪ (筋がちがう)

ʃamadʒiki (正坐)

ʃamadʒiki ʃun (正坐する)

takɪ (丈)

takinu Fudə: (背がのびる)

tɪmamɪ (たこ) 手足にできる豆状のかたくもりあがったもの。mamɪ ともいう。

kufaba (たむし・いんきんなどの皮膚病)

tʃʔi: (血)

tʃʔi: nu ʔidʒitɪ (血が出る)

tsʔikjara (力)

tsʔikjaranu ʔidʒitɪ (力が出る)

duku (毒)

habunu duku (ハブの毒)

tuihada: (鳥肌)

nikun (にきび)

nɪkunnu ʔidʒitɪ (にきびが出る)

harami (妊娠)

haʃije: (走り合い・競走) haʃi: ʃu: bu (走り勝負) ともいう。

gabu (はれもの・おでき) 大小を問わず、はれもの一般にいう。

bjo: ki (病気) bjo: ki muttʃui (病氣をもつ) bjo: ki tsukunai (病氣が強くなる)

Fɪ: (屁)

Fɪ: ʃijun (屁をひる)

ʔada (ほくろ) 「痣」に対応する語であ

るが、意味は「ほくろ」をあらわす。

Funɪ (骨)

ʃirufi (蒙古斑) ʔaodʒirufi ともいう。

ro: mo: (もうろく)

ʔimɪ (夢)

ʔimɪ mitʃan (夢をみた)

(2) 人間関係の語彙

tʃʔu (人)

ʒɪŋga (男) ʒɪŋganu kʔwa (男の子)

wunagu (女) wunagunu kʔwa (女の子)

duʃi (友だち) 浦上では dusɪ という。

ʔuja (親)

dʒu: (父) 古くは ʔaddzə: といった。

ʔamma (母)

mama ʔuja (ママ親) ママ父とママ母の区別はない。

kʔwa (子)

ʔinasapʔwa (小さい子)

ʔa: kʔwa (赤坊)

warabi (子供・童)

tʔaggwa: (ふたご) 浦上では tʔakkwa という。

ʔujamadə: kʔwa (みなし子) 「親迷い子」という表現。

mo: kəkʔwa (私生児) 浦上では niŋgoro kʔwa (ねんごろの子) または kakurikkʔwa (隠れ子) という。

Futtʃu (老人・おとな)

ʔatadan Futtʃu natɪ (いつのまにか老人になった)

nɪsə: (青年)

mə: rabɪ (女童)

tuʃi (年令)
 tʔi: duʃi (同い年) tatʃi ともいう。
 jintuʃi ともいう。
 ja: (家)
 wa: kja: ja: (私の家・家庭)
 na: kja: ja: (あなたの家・家庭)
 ʔurikja: ja: (お前の家・家庭)
 ja: nindzu (家族) 浦上では kenedʒo
 という。
 haro: dʒi (親戚・一族)
 sinso: (先祖)
 Fuʃʃu: (祖父) 古くは ʔu: dʒu: といった。
 homma: (祖母)
 kjo: dë: (きょうだい)
 ʔanjo: (兄) 古くは jammʃi: といった。
 浦上では, mʃi: とも, mikkwa とも, ja
 kumʃi ともいう。
 ʔututu (弟) 年下のきょうだいをいう。
 男女ともに用いられる。
 në: (姉) 古くは ba: といった。
 浦上では ʔafe または ʔafekkwa という。
 wunai (女きょうだい) 男きょうだいからい
 う語。姉は sʃda wunai, 妹は wunai とい
 う。wunai に対する男きょうだいをあらわ
 すキキーという語は廃れて用いられなくなっ
 ている。kjo: dë: (きょうだい) は男女と
 もに多用する。浦上では wunai (女きょう
 だい) も ji: ri (男きょうだい) も用いら
 れている。
 ʔututuggwa (末っ子) 男女に用いる。
 浦上では ʔututukkʔwa という。
 sʃda (年上) 男女の別なく年上の者をさす。
 長男・長女の意でも用いる。ʔututu の対。
 ʔututu: (年上) 男女の別なく年下の者を
 さす。

ʔatutui (あととり)
 maga: (孫)
 matamaga: (ひまご)
 çimaga (やしゃご)
 「ひまご」に対応する語形は「やしゃご」の
 意味にずれている。
 浦上では mʔaga (孫) matamʔaga (ひま
 ご) çimʔaga (やしゃご) kanëmʔaga
 (その次の孫) simʔaga (その次の孫) の
 ように呼び分けられる。
 wudʒi: (おじ)
 wuba: (おば) wubakë: ともいう。
 mʃi: wui (甥と姪のこと) もともと mʃi: は
 姪, wui は甥をあらわしていたのが, その区
 別をしなくなったのであろう。浦上では現在
 でも wui (甥), mʃi (姪) のように区別
 を保っている。
 ʔitoko (いとこ)
 ʃutunuʔuja (しゅうと・しゅうとめ)
 浦上では ʔujafutu といって語順が異なる。
 そして, sʃtukkʔwa (こじゅうと) sʃtuw
 udʒi (義理のおじ) sʃtuwuba (義理の
 おば) という言い方がある。とくに「しゅう
 と」と「しゅうとめ」とを区別しない。
 sato (里)
 mikjamudui (里帰り)
 wuttu (夫)
 tudʒi (妻)
 tudʒitu: (夫婦)
 これは tudʒiwuttu (妻夫) という複合語か
 ら変化した語であろう。浦上では tudʒutu
 という。複合語の順が「妻夫」になっている
 のは, 「万葉集」などの「母父」などの順と
 対比されよう。
 「嫁ぐこと」は ja: tatʃi といい, 「妻をも

つこと」は tudzikamë:i という。「分家すること」は ja:wai という。沖縄ではヤータチュンといえ、分家する意になって、湯湾とはずれている。

jiggadatfi: (寡夫)

wunagudatfi: (寡婦)

katagu: (片方・不揃) もともと一対であるべきものの一方が欠けること。夫婦ならばどちらか片方が欠けることにもいう。

nigguru (めかけ) 古語の「ねんごろ」に対応する語。浦上では niggoro という。

ja:ntfu (下男・女中)「家の人」という表現。最近では tsiko:rubë:という。

これは「使われ人」の意である。bë:は「部」に対応する語であろう。

k[?]wadakibë: (子もり)

浦上では k[?]wamori という。

ʔasanī (朝寝)

ʔasanibo: (朝寝坊)

ʔaragaja: (あばれん坊) 動詞は ʔaragai (あばれる) という。浦上では ʔogorë (あばれる) という。

ʔiçira: (甘ったれ)

ʔi:kuna: (言い争うこと)

ʔi:kuna: ʃun (言い争いをする)

ʃo:wari: (意地悪)

junībui (居ねむり)

sīro: (嘘)

sīro: banafi: (嘘の話)

ʃin ʔitfi banafi (あてにならない話)「千一話」に対応する語で、千のうち一つの確率がある話という意であろう。

ja:gjo: sutunakja: (内弁慶) 浦上では jambifi という。

kuikutfi (音沙汰)

kuikutfin kikjara (音沙汰も知れない) turë: (喧嘩) 浦上では torai という。

浦上では子供の言い合いなどは jodgai という。湯湾でも、浦上でも、沖縄のオーユンに対応する語がない。

m[?]anturë: (馬のけんか) さかりのついためす馬を前において、おす馬同志でけんかをさせる。宮古にも同様の風習がある。

m[?]anhafi:je: (草競馬)

ʔufinturë: (闘牛)

tuinaturë: (闘鶏)

kumanda: (倏約者)

Futīgutu (小言)

çigurusama: (寒がり)

浦上では sikuntorëmun という。

të:ni: (ていねい・大事)

të:ni:fi: (大事にする)

nakja: (泣き虫)

danno: (怠け者) sinito:ra:ともいう。

nīgutu (寝言) nīgutufa: (寝言をいう人)

ʃabitʃiki: (夢遊病の気のある人)

nīkusī (寝相)「寝癖」という表現。

nīkusīnu warusa (寝相が悪い)

çimma judun (昼寝)

judun は「淀む」に対応する語で、「休む」の意をあらわす。

kattë: ʃo: bai (わがまま者)

(3) 生物関係の語彙

kīdamun (獣) ʔikīmun (生きもの)ともいう。浦上では k[?]immun という。

wumun (雄) mīmun (雌)

hammē: (食物一般)「飯米」に対応する語
 で、人間や家畜の食物一般をいう。ʔwamm
 un (豚の餌) ʔuf imm un (牛の餌)
 mʔammun (馬の餌) jidu (魚を釣る餌)
 kabufi (蒔き餌)
 tsibbjun (交尾をする) tsibbidatʃi
 (さかりがつく)
 ʔin (犬) ʔin ともいう。
 jama nan ja ʔinna wuran (山には犬は
 いない)
 ʃifi (猪) 猪を捕えるための落とし穴を
 ʃifi gumui という。現在では wana ともい
 う。猪のようににおいをよくかぎ分けること
 のできる鼻を ʃifi bana という。
 浦上では sīsī という。
 ʔufagi (兎)
 ʔufagiŋko: (兎の皮)
 ʔufi (牛) Fu: gutui (大きい牡牛)
 Fu: は「大」、kutui は「牡牛」。ʔunan
 (牝牛)
 kʔwa ʔufi (仔牛)
 ʔufe: tsusai (牛は強い)
 牛馬を前進させるときは hoi、止まれと命ず
 るときは do: という。浦上では前進は hai、
 止まれは do:、来いは mēimēi という。
 mʔa: (馬) wu: ma (牡馬) mī: ma
 (牝馬)
 mʔaŋkʔwa: gwa: (仔馬)
 ko: mori (こうもり)
 saru (猿)
 nja: (猫)
 nīdzin (ねずみ)
 ʔwa: (豚)
 ɕindʒa: (山羊)
 kudʒija (鯨)

ʔaɕiru (あひる)
 tʃʔattʃʔagwa: (うぐいす)
 kamo: (鴨)
 garasī (からす)
 ju: mundui (雀)
 taka: (鷹)
 tui (鳥)「にわとり」にもいう。kagan
 (鳥のとさか) tatʃi kagan (ピント立
 っているとさか) ʔifikagan (石のよう
 にかたいとさか) tuinu ja: (鳥小屋)
 tuikago: (鳥籠) 浦上では turi とい
 う。
 ɕijoko (ひよこ)
 hato: (鳩) ʔo: hatu (やま鳩)
 ɕu: su (ひょうどり)
 mja: tsikiFu: (ふくろう) その鳴き声は
 kʔuFu kʔuFu という。
 medgiro (目白)
 so: mudʒija: (いもり)「とかげ」の意にも
 なる。
 biki, bikkja: (蛙) ʔotton (食用が
 える) 足にケンがある。
 kamī (亀)
 habu (ハブ・蛇) garasubi (からすへび)
 mattabu: (黒と赤がまざっている蛇)
 ʔo: nadʒi (青大将)
 ku: ha: (まむし)
 jamori (やもり)
 ʔiju (魚)
 munadʒi (むろあじ) gatsun (ひらあじ)
 jadʒi (鮎)
 ʔunagi (鰻)
 kasu: (鰹)
 ʃunabui (かれい)

k[?]iŋgjo (金魚)

koi (鯉)

saba (鯖) ʔakisaba (秋鯖) gunikun
(青鯖)

tʃ[?]in (しろ鯛) tʃ[?]inu ともいう。

dodzo: (どじょう)

tubi ʔiju (飛魚)

fiki (なまこ)

ʔadzabuku (ふぐ) ʔabasi (針千本)

Funa: (鮒)

fibi (まぐろ)

ta: ʔijugwa: (めだか)

bummade (虻) 盆の頃まで居るからそのよ
うに表現するという。

ʔa: muʃi: (油虫・ごきぶり)

ʔan, ʔaniggwa (蟻)

ʔannusi: (蟻地獄)

gatta: (いなご・ばった)

ʔudgi (うじ)

gadzan (蚊)

dgara: (かまきり)

ʔundzo: muʃi (毛虫) ʔundzo: は「ぼろ
で縫い合わせた刺子の様なもの」をいう。
それを着た虫という表現。

ko: rogi (こおろぎ)

kutsubuta: (こがね虫)

xisiʃkudgi: (さなぎ)

ʔissunha: ja: (尺取り虫) 「一寸ずつ這う
虫」という表現。

fijan (虱・髪虱) k[?]indzijan (着物につ
く虱)

ʔasasa: (蟬)

tʃo: tʃo (蝶)

kami: dʒa: (とんぼ)

nun (蚤)

hai (蠅)

hatʃi (蜂) tsiburubatʃi: (熊蜂)

mitʃabatʃi: (土の中に巣を作る蜂)

gajabatʃi (小さくて黄色で縦に巣を作る
蜂)

muʃikë: ra (虫の総称)

tsindai (かたつむり)

gan (蟹) gasama: (海蟹) ʔaduga:
(海蟹)

ko: gan (川蟹)

kubu: (蜘蛛)

tan (だに)

nabikudgi: (なめくじ)

mimidzi (みみず)

mukade: (百足)

mugi: (あさり・はまぐり)

ʔikja (いか)

gatsitsi: (うに)

ʔifutagga: (海老・車えび) ʔibitagga:
(伊勢えび) tagga: (川えび)

mja: (貝) まき貝のことをいう。

gaki: (かき)

ʔira (くらげ)

tu: (たこ) sigai (手が長く小さいたこ)

tammja (たにし)

ʔamamu: (やどかり)

suwai (しゃこがい)

tattʃagë: (しゃこ)

mugi: (はまぐり)

dzibo: (尾)

hagi (足) 人間や動物の足にいう。

nakan (腸)

hani (羽・翼)
 ?iki (うろこ)
 ko: (甲) kamigko: (亀の甲) gannu
 ko: (蟹の甲)
 kiba (牙) fifigkiba (猪の牙)
 tsimi (爪)
 ko: (皮)
 cigi (毛) 動物の毛一般。
 tamagu (卵) 昔は kuga といいた。
 kuga natfan (卵をうんだ)
 kusu (糞) kusu majun (糞をする)

(4) 植物関係の語彙

fimunai (うらなり)
 juda (枝)
 kin juda (木の枝)
 ko: (皮)
 ki: nnai (果実)
 ki: (木)
 ki: n fiba (落葉) ki: nu hana (梢・
 木の先) ki: n sura (木の上) 方)
 ki: n nai (木の実) kin kagi (木の
 蔭) ki: nigui (木の根・切り株)
 kusa (草)
 kusawara: (草原)
 wuinafa: (狂い咲き)
 safiki (挿し木)
 sin (芯)
 ki: nu sin (木の芯)
 tani (種)
 tani ?urufi (種をまく)
 tanimun (種) 「たねもの」という表
 現。沖縄ではムンチャニという。これは、「も
 のたね」という表現。

ts?ubomi (つぼみ)
 kadzira (蔓)
 nigui (根っこ)
 kinha: (葉) ha: ともいう。
 hana (花)
 hananu so: ritan (花がしおれた)
 bufi (節) 単独でも語頭は濁音である。
 kimbufi (木の節) de: mbufi (竹の節)
 Fu: (穂)
 n?ju:n Fu: (稲の穂)
 wa: mui (若芽)
 wa: は waka (若) の k → h → 脱落, の変
 化を経たもの。mui は mi: から変化した
 ものであろう。i は発達して ui になるこ
 とがある。人によっては wa: mi ともいって
 いる。沖縄県羽地で「米」を Fumui という
 も、これと同類の発達であろう。
 ?asa (麻) 「麻」に似ているものに kadzi
 (こうぞう) というものがある。
 ?a: mam: (あずき)
 ?o: (粟)
 ?itfubi: (いちご・野いちご)
 n?i (稲)
 n?inFu: (稲穂)
 n?i kai (稲を刈る)
 hans: (芋) 「さつま芋」のこと。?unu (里
 芋) dzagaimo (じゃがいも) jamain
 (山芋)
 ?iggemmam: (いんげん豆)
 ?ui (瓜) nigja?uri (苦瓜)
 jendo: (えんどう)
 ?amabo: i (がじゅまる)
 gaki (柿) jamagaki (山柿) fibu: (渋
 柿) 染料にする。

ko: dʒi (かび) ko: dʒi muijui (かびが
 生える)
 to: tsiburu (かぼちゃ)
 ga:ja (茅) 語頭は濁音。 sasagaja (ささ
 がや) かやぶきの屋根に用いる茅の一種。
 miggui (木くらげ)
 naba (きのこ)
 kʷagi (桑)
 浦上では kʷagè という。 nadisi (桑の実)
 gobo: (ごぼう)
 kubu (昆布)
 kunnjaku (こんにやく)
 sakaki (榊)
 sakura (桜)
 sasa (笹)
 wugi (さとうきび)
 saboten (さぼてん)
 ʔa: buraki (さるすべり)
 ʔuru (珊瑚礁)
 tsigu (棕櫚)
 ʃo: ga (しょうが)
 suikwa (西瓜)
 siʒinuki (杉の木)
 diʦiʦi (すすき) wubana: (すすきの花)
 siʦiʦi (蘇鉄)
 ʔa: nai 蘇鉄の赤い実。
 飢饉のときには、蘇鉄の赤い実をとり、芯を
 加工して食用にした。
 do: kuni (大根)
 to: Fumami (大豆) 「豆腐豆」という表現。
 dë: (竹)
 diʒkwa: (たけのこ)
 tamanegi (玉ねぎ)
 tʃa: (茶)
 tsibaki (椿)

kufu (とうがらし)
 ʃubui (とうがん)
 to: gin (とうもろこし) kusato: gin
 (とうもろこし) と hanato: gin (こうり
 ゃん) のように区別する。
 tomato (とまと)
 na: (菜)
 nasubi (茄子)
 bija (にら)
 në: dʒin (にんじん)
 xiru (にんにく)
 niFuka (ねぎ) 「根深」という表現。
 tamanegi (玉ねぎ)
 nibuikusa (ねむの木)
 kafikja (のり) sunui (すのり)
 bafa: (芭蕉布) bafagin (芭蕉着物)
 bafa: mi: (芭蕉の実・バナナ)
 bara (ばら)
 piʒkusa (ひえ)
 ʒinoki (ひのき)
 ʒo: tan (ひょうたん)
 tsiburu (ひょうたんの一種)
 ʔasagao (朝顔)
 biwa (びわ)
 tsibafa: (ふき・つわぶきのこと)
 nabe: ra: (へちま)
 makii (槇) ʒitotsuba ともいう。
 matsigi (松)
 matsinuha: (松葉)
 matsinnai (まつかさ)
 tuidzi (松の脂)
 mami (豆)
 to: Fu mami (大豆) 「豆腐豆」という
 表現。
 nikan (みかん)

niga (みょうが)
 mugi (麦)
 mu: (藻)
 mumu (桃)
 jasë: (野菜) 浦上では jafe という。
 janagi (柳)
 jui (百合) juinuhana (百合の花)
 Futsi (よもぎ)
 gakkju: (らっきょう)
 dzimamï (落花生)「地豆」という表現。
 wakame (わかめ)
 wata (綿)
 santukiwarabi (わらび)

(5) 自然関係の語彙

?ama (あちら) ?uma (そちら)
 kuma (こちら)
 më: mukë: (前向き) ?ufumukë: (後向き)
 ?amakatfi mukatun (あちらを向いている)
 kammukatun (前に向いている)
 ?agam mukatun (東を向いている)
 da: (どこ) da: ?idziga wa:ran (どこへ行ったかわからない)
 tatï (縦)
 juku (横) majuku (真横)
 suba (傍)
 tau (平坦)
 migi: (右) migigawa (右側)
 çidgai (左) çidgaigawa (左側)
 ?ui (上) ?uinuko: (川上)
 fa: (下) ko: nfa: (川下)
 manna: (真中)
 sakafima (逆さ) sakadatfi (逆立ち)
 tfidgi (頂) jamantfidgi (山頂)

sura (梢)
 saki (先) ho: tfanu saki (庖丁の先)
 më: (前) ?ufiju (後)
 më: は「前」のほかに、傍・ところの意をもっている。
 wa: më: (自分のところ)
 tf²unu më: (他人のところ)
 ?an tf²unu më: katfi junna (あの人のところへ寄るな)
 jamammë: (山の側)
 jammë: nantï ?asibuna (家の前<ところ>で遊ぶな)
 ?antf²unu më: katfi ja: tatfi (あの人のところへ嫁ぐ)
 ?agari (東) kutfi (東風)
 ?uki (西) 湯湾から方角をみると、焼内湾の沖の方向がちょうど西に当たるところから、「沖」が「西」の意味に転じたものと考えられる。
 ?ukikadgi (西風)
 Fë: (南) Fë: kadgi (南風)
 nifi (北)「北風」のことも nifi という。
 nifikadgi ともいうが、普通は nifi だけでよい。
 kadgi (風)
 kutfi kadgi (東風) ?uki kadgi (西風)
 Fë: kadgi (南風) nifi kadgi (北風)
 maki kadgi (つむじ風) te: Fu: (台風) harafi (追風・順風)「舟を走らす」ということからの命名であろう。
 ?iru (色)
 k²uru (黒) fu: (白) ?a: (赤)
 ?ao (青) ?un ?iru ともいう。「緑」のこともいう。
 k²i: (黄)
 kada (匂い)
 ko: bi kada (着物のやけるにおい)
 nabitfiki: kada (ごはんのこげくさい)

におい) nabitʃiki: は「鍋付き」という表現で、「おこげ」をあらわす。

ʔwē: da (間)

ʔa: gai (あかり)

ʔagi (陸) 海に対して陸上をいう。沖縄では海辺の「浅いところ」をさすことがある。

jama (山) ʔoka (丘・標準語的)

kʔubu, saku (谷)

sagē: ʃa (険しい) sagē: ʃan jama

(険しい山) sagē: ʃan hatē: (険し

い斜面の畑) sagē: ʃan mitʃi (険しい道) tʃʔidʒi (頂) wubanī (尾根)

ʔabuʃi (畦)

浦上では、「畑の畦」はʔabusī, 「田の畦」はtambusīという。

mī: (穴・小さい穴・すき間)

ʔidʒigutʃi (出口) Fē: gutʃi (入口)

buʃimmī: (節穴)

ʔamī (雨)

wuīnu ʔamī (時々降る雨・一時的に降る

雨・部分的に降る雨・夕立) nagamī (梅雨)

nagamī nu Fētʃan (梅雨に入った)

nagamīnu ʔagatʃan (梅雨があがった)

ʔatadan ʔamī (にわか雨)

ʔararī (あられ)

ʔamaʃudai (雨だれ)「雨すだれ」という表現であろう。

ʔu: mīdzī (大水)

ʔarītʃi (荒地) sīnadʒi (砂地)

ʔikī (池)

ʔifi (石)

ʔaugan (青岩) ʔa: gan (赤岩)

ʔun (海) 浦上ではʔumiという。

ʔuki (沖) 湯湾集落から焼内湾の沖の方向

は西の方角に当たるところから、「西」の意味に転訛している。

ʔuratʃi (浦内) 地名。

wan (湾)

sī: (暗礁)

ʔumutī (おもて)

ʔutu (音)

ʔaradzibatē: (開墾地)

kagē: (陰)

kata (形)

katanu kʃorasa (形が美しい)

tīggoro (雷) tīg は「天」、goro は「ゴロゴロ」という擬声語。

tīggoronu ʔutijun (雷が落ちる)

gorogoro (雷鳴)

ko: (川)

nagarigo: (流れ)「流れ川」という表現。洗濯場でもある。

Fu: ko: (大川) ko: nʃi: (川尻)

mīdzī tamarī (水たまり)

ʔidʒun (泉)

taki (滝)

ko: nubui (川をのぼる) nubujui ともいう。

ko: kudai (川をくだる) kudajui ともいう。

kata (形)

kanī (金)

kuganī (黄金) ʃu: ganī (銀・しろがね)

ʔa: ganī (銅)「銅線」の意にもなる。

kʔuruganī (鉄)

kʔumu (雲)

kʔiri (霧)

çu: bē: (白がすみ)

kʔurubē: (雨が降らずに黒がすみにおおわ

れている様子)	kē : sī (台風のかえし)
ʔarabē : (海が荒れてかすんでいる様子)	tama (玉)
kibutsīmi : (全体的にぼやけている様子)	tsību (粒)
kībuʃi (煙)	dʒi : (地・地面)
saki (崎)	mitʃa (土)
湯湾の周辺には kammadzaki, ko : radza	muta (泥)
ki, kanendzaki などの崎の名がある。	bammitʃa (粘土)
hana (岬)	mitʃagabu (土のかたまり)
湯湾の周辺には tʃa : gibana, tombana,	tīn (天)
ju : bimbana などの岬の名がある。	çi : (日) çi : nu nagasa (日が長い)
ʃu : midzī (塩水)	tsīki (月)
nai (地震)	Fuʃi (星)
nainu jutan (地震がきた)	tugai (尖ったもの)
kjontsika kjontsika 地震のときの呪咀。	kadu (かど)
京都は地震がほとんどないから「京都へ京都へ」といった、と説明してくれた。	saŋkaku : (三角)
最近では kenotʃika kenotʃika ともいう。	ʃikaku (四角) makkaku (真四角)
また kʷagēmutu ʃakku mutu (桑の元、	mo : ru (丸・円) mo : rusan (まるい)
谷の元) ともいう。	sīn (隅) juʃin (四隅・四角)
ʃima (島)	tunai (隣)
部落・集落・故郷の意味にも用いられる。	mītamidzī (どぶ水)
tʃʷunʃima (余所の集落) 「人の島」つまり	turī (風)
「他人の島」という表現。	çikjaidurī (べた風) 風で水面が光って
kagē : (すがた)	いる様子からの表現。
sīna (砂)	ʔaraʃi (嵐)
ʃiju sīna (白砂)	kawaʃi (海の嵐) ko : ʔaraʃi (川か
sīna : tunna (砂を取るな)	ら吹きおろして来る嵐)
suku (底)	namikadzē : (浪風)
suko : ɕu : sa (底は広い)	guta (波) 白波が立っているような波。
ta : (田)	gutanu dʒanasa ʔidʒitī (波がものす
tīda (太陽)	ごく出た)
tīdanu ʔagatī (太陽があがる)	namī (波) 普通の波。
tīdanu ʔutī (太陽が落ちる)	ʃu : (潮)
tīdanu ʔittʃi (太陽が入る)	mitʃiʃu (満ち潮) çikiʃu (ひき潮)
ʔasatīda (朝日)	hatē : (畑) 家から離れているところにあ

る畑。芋など主たる作物を植える。
 ʔatai (前庭などにある畑) 野菜などを植える。
 hama (浜)
 hamo:ɕu:sai (浜は広い)
 hadzure, hadziɾi (はずれ)
 mura hadzure (村はずれ)
 mʔatsi (火)
 kʔwadʒi (火事) mʔatsinhana (ほのお) nitsi (熱)
 nitsinu ta:sa:n (熱が高い)
 ɕikjai (光)
 ɕidzui (いなびかり)
 ʔa:gai (ランプや電気のひかり)
 kʔurasin (闇)
 kagë: (影)
 ɕidui (ひでり)
 rukugwatʃi ɕidui (6月のひでり)
 tʃʔu (人・他人・余所)
 tʃʔunʃimantʃʔu (余所の部落の人)
 自分と同じ集落でない他の集落の出身。
 ʔaja (ひび)
 ʔajanu ʔidʒun (ひびが入る)
 go:ru: (丸)
 mĩdzĩ (水)
 tsĩju (露)
 ʔo: (泡)
 sa:ju: (白湯)
 ʔatsiki (湯気)
 midʒu: (溝)
 janagi mĩdzĩ (炊事などで汚れたどぶ水)
 ʔigawa (井戸)
 tamiki (ため池)
 mitʃi (道)
 jamamitʃi (山道)

hafi (橋)
 jama (山)
 ju: (湯)
 ʔatsiki (湯気)
 ʔatsikinu FuiFui ʔidʒiti (湯気がゆらゆら出る)
 kojomi (暦)
 ʔitsi (いつ)
 ʔitsi kjui (いつ来るか)
 mukafi (昔)
 si:tsi (季節)
 とくに、種子時などの季節をいう。
 haru (春) natsi (夏) ʔaki (秋)
 Fujū (冬) miFujū (真冬)
 ʔaki (収穫時期) 6・7月の頃。
 ɕinjutʃi (毎日)
 ɕinjutʃi hataraki (毎日働く)
 si:kamaɕka: dʒi (毎朝)
 juruɕka: dʒi (毎晩)
 tʃʔu:igufi (一日おき)「一日越し」という表現。
 ju:hafi: (一晩中)
 tʃʔu: juggadi (一日中) tʃʔu:juは「一日」のこと
 xi:mamadi (午前中)「昼まで」という表現。
 xi:mma:ra (午後の間)
 saki (さっき)
 mē: (前)
 ʔufiju (後)
 ʔatu (あと)
 kunuguru (この頃)
 kunē:da (この間)

na : tʃa (翌日)

ju : Fumë : (夜明け前)

juʔakʲi (夜明け)

ʔa : tuki (暁)

ʔa : tuki xi : (早起き) 農家は3時頃から起きて働いた。

ʔasaFutʃi (朝の5・6時頃)

ʔasamma (朝の7・8時頃)

sikama (朝) ʔasa ともいう。

tʃa : wui (朝の10時頃の休み時)

ximma (昼)

ximma wui (昼食時分)

xiru (昼) 夜に対する語。

xiruximma (昼の2・3時頃)

santuki (午後の3時頃)

jantuki (日が落ちる頃)

junë : gata (夕方)

jumaguri ともいう。

juru (夜) 昼に対する語。

juna : (夜中)

majuna : (真夜中)

kju : (きょう)

ʔatʃa : (あした)

ʔasati : (あさって)

juha (しあさって)

ʔitsika (五日あと) muika (六日あと)

naʃka (七日あと)

kʲinju (きのう)

wuttui (おととい)

wuhanatʲi (さきおととい)

ʔitsikanatʲi (五日まえ) muikanatʲi

(六日まえ) naʃkanatʲi (七日まえ)

sikama (今朝)

沖縄奥武ではシカマは単独では使わないが、
チュシカマシグトゥ (一朝でできる仕事) の
ように、慣用語の中で化石的に用いられる。

ʔatʃan sikama (明朝)

kʲinnu sikama (昨朝)

junë : (今夜)

ʔatʃan junë : (明晩)

ʔasatʲin junë : (明明晩)

jubʲi (昨晚)

kʲinjun juru : (一昨晚)

kuntsiki (今月)

kjuntsiki (来月) 「来る月」という表現。

ʔidʒantsiki (先月) 「行った月」という表現。

kutufʲi : (今年)

janʲi (来年)

na : mitʃu (再来年) 沖縄方言ではナーンチュという。

na : jutu (三年後) na : ʔitsʲitu (四年後) のように表現できる。

kudu (去年)

mitʃunatʲi (一昨年) 沖縄方言ではソーチュナティという。

jutunatʲi (四年前) ʔitsʲitunatʲi (五年前)

ʃo : gadʒiki (一月・正月)

nigatsʲi (二月)

sagʒwatsʲi (三月)

ʃigwatsʲi (四月)

gogwatsʲi (五月)

rukugwatsʲi (六月)

ʃitʃigwatsʲi (七月)

hatʃigwatsʲi (八月)

kugwatsʲi (九月)

dzu : gwatsʲi (十月)

ʃimutsiki (十一月)
ʃiwatsi (十二月) tsi は類推によるもの。

tʰi:, tʰitsi (一つ)
tʰa: tsi (二つ)
mi: tsi (三つ)
ju: tsi (四つ)
ʔitsitsi (五つ)
mu: tsi (六つ)
nanatsi (七つ)
ja: tsi (八つ)
kʰu: nutsi (九つ)
tu: (十)
tu: tʰi:, dgu: itʃi (十一)
nidgu: (二十)
sandgu: (三十)
ʃidgu: (四十)
godgu: (五十)
rukudgu: (六十)
ʃitʃidgu: (七十)
hatʃidgu: (八十)
kju: dgu: (九十)
çaku (百)
niçaku (二百)
ʃen (千)
man (万)
tʃʰui (一人)
tʰai (二人)
mitʃai (三人)
jutai (四人)
ʔitsitai (五人)
mutai (六人)
nanatai (七人)
jatai (八人)

kuntai (九人)
tutai (十人)
tʃʰukë: i (一回)
tʃʰusa: (一皿)
tʃʰuma: i (一碗)

ʔikutsi (いくつ)
ʔikutsi ʔai (いくつあるか)
ʔikutsi jatʃin kurrʃi (いくつでもくれ)
ʔikjassa (いくら)
ʔikjassa jatʃin kurrʃi (いくらでもくれ)
muru (全部)
katagu: (片方) 箸・履物・夫婦などともと一対あるものの片方を欠くこと。
hambun (半分)
bai (倍)
tʰassa (二部) tʰassa natʃi (二倍になる)
missa (三倍)
jussa (四倍)
gassa (これだけの大きさ)
沖縄では、ʔussa (これだけの大きさ) は用いられるが、tʰassa (二倍) ~ jussa (四倍) のような形は用いられない。

(6) 飲食関係の語彙

ʔasaban (朝食)
tʃa: wui (朝の10時頃のお茶休み頃)
çimmaban (昼食)
santuki (昼の3時頃のお茶休み頃)
ju: ban (夕食)
madumun (間食)

garĩjamĩ (晩酌)

darĩ は darĩjui (疲れる)の語幹, jamĩ は「止め」である。「疲れがなくなる」という意である。一日の疲れを晩酌によって癒すということからの命名である。

ダレヤメは鹿児島県指宿地方で用いられている語である。奄美で用いられている語はこれが移入されたものであろう。この語は沖縄まで及んだと思われるが、沖縄では現在では用いられない。現在の沖縄では du : bunino : ʃi といっている。これは「体の骨の疲れなおし」という表現で、ダレヤメの発想と同じものである。

ʔadgi (味)

ʔamĩ (飴) ʔame ともいう。

ʔan (餡)

ʔudon (うどん)

katĩmun (おかず) katĩ は古語の「^か揉つ」と同根。動詞は katĩjui (主食に加えて食う) が用いられる。標準語では「かてて加えて」のようなイディオムの中に残っているだけである。

nabitʃiki (おこげ) ごはんのほかに、鍋で煮るものがこげついたものにも用いられる。

kasu : Fuji (鯉節)

kamabuku (かまぼこ) この語は最近移入されたものである。

mun (食いもの) 食物一般をさす。

hammè : ともいう。 hammè : は語の対応からみれば、「飯米」のことであるが、米だけではなく、芋など食物一般をさすことができる。

ku : (粉)

mamĩgku : (きな粉)

gusso : (御馳走)

gusso : tsukui (料理する)「御馳走」を作る」という表現。

ʔuban (ごはん)

ʔabè : (お粥)

bè : ri, bè : jun 「お粥を食べる」こと、
bè : ʃun は「食べさせる」ことをあらわす。

kumĩ (米)

ʔi : kigumĩ (煎り米) お菓子として用いる。

sakugumĩ (うるち米)

mutsĩgumĩ (もち米)

浦上では、とくに ʔiganasĩ という。これは「稲加那志」という尊称の表現である。

sè : (酒)

ʔudzè : numja : (大酒飲み)

sata : (砂糖)

safĩn (刺身)

浦上では namaʃi という。沖縄では namaʃi が本来の語であり、safĩmi という語は新しい移入語である。

maʃu (塩)

ʃu : mĩdzĩ (潮水)

ʃo : i (醤油)

sĩ : (酢)

浦上では sĩ : ともいうが、ʔamami ともいう。沖縄では ʔamazaki といい、これは「甘酒」に対応する語である。

ʃimbe : (せんべい)

do : se : (雑炊)

tabaku (たばこ)

tabaku Fuki (たばこを吸う) 最近では Fuki のかわりに、numi (飲む) も用いられるようになった。

kĩfi : (きせる・煙管)

sagido: gu (たばこ入れ) 浦上では
handgitfi という。
tabakubun (たばこ盆)
kifin jana (きせるにたまるたばこのや
に) jana だけでもいう。
dagu (だんご) 最近は muttji: という。
tja: (茶)
tjabafira (茶柱)
tjaŋkasī (茶がら)
tsikimun (漬物)
ʔaburagē: (油揚げ・てんぷら)
namamun (生もの)
mandgu: (饅頭)
wata ʔippai (満腹)「腹一杯」という表現。
動詞として tsimai (満腹になる)がある。
これは「つまる」に対応する。
ʔu: dagurē: (大食い)
misu: (味噌)
muttji: (餅)
mojafi (もやし)「もやし」は昔は作らな
かったので語がない。mojafi は移入語。
浦上では ʔujafi という。これは「生やし」
という表現であろう。沖縄では, ma: mina
という。これは「豆菜」という表現である。
ju: (湯)
ʔatsikī (湯気)

(7) 衣服関係の語彙

nuiso: (糸・木綿糸)「縫い糸」という表現。
kʔinuito (絹糸)
hadziki (いれずみ)「針突き」という表現。
ʔabi: (おしゃれ)
ʔofiroi (おしろい)
kʔwadaki kʔibi: (おおい紐)

kasa (笠・傘)
ʔamagasa (雨傘)
tīdagasa (日傘)
daggasā (こうもりがさ)
kappa: (合羽) 最近の移入語。
tuiki: (かすり)
tuiki: gin (大島かすり)
kandzafi (かんざし)
kʔin (着物) 着物の総称。kʔinuともいう。
ja: gi: (ふだん着)
kjuragin (よそいき・晴着)「きれいな
着物」という表現。
wakufigin (仕事着)
jarēgin, jarigin (ぼろの着物)すり切
れた着物。jarigo: ともいう。
Fukuta: (ぼろで編んだ着物)
ʔwabo: i (袖なしのはおるような着物)
sidzikʔijabao: i (袖なしの着物)
ʔundgo: (ぼろ着物)やぶれた着物を細く
さいて、それで織って作った着物。
maigjo: (おしめ) mai は「尻」の意。
dziban (肌着)
battfe: (ももひき)
mompe (もんぺ)
hakama (袴)
ʔwagi (上着)
kʔinFufi (着物の虫干し)
ʔitfugin (絹着物) ʔitfu は絹のこと。
kʔinnu ʔura (着物の裏)
ʔuragē: fi (裏返しに着ること)
kʔinnu susu (着物の裾)
kʔubi (襟) kʔinnu kʔubi ともいう。
sudi (袖)
Fukkuro: (ふところ)
haoi (羽織)

hantën (はんでん) ?waboi ともいう。
 gwaito: (外套) 新しい移入語。
 watairi (綿入れ)
 k[?]ju:bi: (帯)
 kjahan (きやはん)
 sabaki: (櫛)
 k[?]jubi: (腰紐)
 kaniFudo: (財布) 持つときは、首にかけた。
 saiho: (裁縫)
 maitëi (尻はしより)
 guda: (地味な人) つき合いの悪い人に対する悪評として用いる。?ints'innu tʃ[?]u
 ともいう。
 sadzï (頭巾) 昔の士族が笠の下から被っていた。ふろしきのように大きく黒色のもの。「てぬぐい」は tînuḡë または tînuḡui という。
 沖縄ではティーサージが「てぬぐい」をあらわしているが、このサージは sadzï と同根であろう。「手の」サージという表現をとっている。
 k[?]in ?arë (ぜんたく) 最近は ſentaku という。
 takï (丈)
 tas'iki (襦)
 tarë: (盥)
 gufan (杖)
 tînuḡë (てぬぐい) tînuḡui ともいう。
 tînsi: (手袋) 「手の巢」という表現。
 刀の鞘なども si: という。この頃では tîbukuro といっている。
 durubo: (どろだらけ)
 nunu (布)
 tammun (反物)
 nui (糊)

k[?]ummun (履物)
 k[?]udzï (靴)
 ?afigja (下駄) bukkui ともいう。
 ts'iki ?afi (高下駄) 「付け足」という表現。
 saba (草履)
 tabi (足袋)
 waradgi (わらじ)
 hada: (裸)
 hada: nai (裸になる)
 hadafi (裸足)
 hanawu: (鼻緒)
 ?ikjanaga: (片ちんば) 「短さ長さ」という表現。
 mintsitu: (頬かむり)
 ?umugï sadgi: ともいう。
 më: dari (前掛)
 mju: (蓑)
 miḡani (めがね)
 mumin (木綿布)
 ?ujubïḡani (指輪)
 kagi: (容姿)
 dampatsï (理髪)
 dampatsïja: (理髪店)

(8) 住居関係の語彙

ja: (家)
 ?ufin ja: (牛小屋)
 m[?]an ja: (馬小屋)
 豚小屋・山羊小屋・鶏小屋は ?wan si:, çindzan si:, tuin si: のように、si: (巢) を用いている。
 jammë: (庭) 「家の前」という表現。
 屋敷内の母屋の前の広いところ。
 jagkufi (家の後にある屋敷内のあき地)

jafikin sîmi (屋敷の隅)
 janna: (家の中) ʔutʃi (奥)
 sutumaro: ru (家の周囲)
 ja: ʔutsi: (移転・引越し) 浦上では
 nawarjun (移転する) という動詞形があ
 る。
 gajabuki (かやぶきの家)
 普通は sasagaja を用いてふく、
 ja: nsusu (軒) 屋根の下方の雨だれの
 落ちる部分。「家の裾」という表現。かや
 ぶきの軒を切り揃えて仕上げをすることを
 susuhanî という。これは「裾はね」という
 表現である。
 tanuki (ひさし) dehaともいう。これ
 は「出羽」という表現である。
 nikaija: (二階建)
 kawaraja: (瓦ぶきの家)
 jadui (小屋・仮小屋) 屋敷内にも畑に
 も建てた。農繁期には畑の jaduiで幾日も寝
 起きして働いた。とくに製糖期には畑の ja
 dui を作って幾日も泊まりこんだ。
 nakan ja: (母屋) nakaja ともいう。
 屋敷内には fuin (客間・書院) nakaja
 (中屋) to: gura (炊事場)の順に家を
 建てた。 nakan ja: はその位置から出た
 表現である。
 ʔamî mui (雨漏り)
 ʔisi (椅子)
 kʔumja (ふみだい)
 jigawa (堀井戸)
 xê: gutʃi (入口)
 sîbajadu (横の方にある出入口)
 jin (縁)
 hafigo (階段)
 kaki (垣) 垣根のことも柵のこともさす。

猪の害を避けるために山と畑の間に木の柵を
 めぐらした。これを fimî: gaki という。
 sasî (鍵) 錠のこと。
 sasî tsimîrî (鍵をかける) kagi と
 もいう。
 kama (かまど)
 nuigama (土で塗って作ったかまど)
 kamui (鴨居)
 kaja (蚊帳)
 garasî (ガラス)
 kawara (瓦)
 kʔura (倉) 母屋の前に建てる高倉をさす。
 もみや蘇鉄の実を納めておく。
 kʔutʃa (味噌・塩・しょう油などの食物を
 入れて置く物置のようなところ)
 kʔuŋkʔun (玄関)
 naniku (ごみ) 庭などから出るごみ。
 naniku ʔiri (ごみ入れ)
 kanakudzî (屑) 鉋屑のこと。
 fiki: (敷居)
 fo: dʒi (障子)
 dʒiju (炉) 「地炉」に対応する語。
 na: ndʒiju (家の中に設けられた炉)
 dʒijumbutʃi (炉の縁)
 sî: (巢・家畜小屋)
 ʔwansî: (豚小屋)
 ʒindzansî: (山羊の小屋) 山羊はきれ
 いずきなので、別屋根を建てずに、高倉の下
 で飼うのが普通であった。
 tuinusî: (鶏小屋)
 「牛小屋」と「馬小屋」だけは sî: を用い
 ずに、ʔufin ja:, mʔan ja: という。
 kubunsî: (蜘蛛の巣)
 to: gura (炊事場・台所) 母屋とは別棟に
 なっている。沖縄ではトゥングワという。

sisi (煤)

so: dgi (掃除)

tatami (畳)

tansu (たんす)

tansunu kaggu (たんすの引き出し)

tukumma: (床の間)

tindgo: (天井)

jadu: (戸・雨戸・戸口)「屋戸」という表現。

ta: jadu: (半窓・高窓)

jadu: ?aki (雨戸をあける)

jadu: k?u: i: (雨戸をしめる)

jadu ?utufi (戸袋) 簡単な戸袋で、「戸落とし」という表現。

tudana (戸棚)

dodai (土台)

sasija (納屋)

hafi (梯子)

haja (柱・大黒柱)

?uratfa (壁)「裏板」という表現。

Futsuma (ふすま)

sinsu: dana (仏壇) sinsu: は「先祖」

に対応する語で、祖神をあらわす。

ma: (部屋)

t?uma: (一間) t?ama: (二間)

?umuti (表部屋) ?utfi (内部屋)

ʃintʃin (便所)「雪隠」に対応する語。

現在では、ほとんど用いられなくなっている。

sasija (物置) 味噌・漬物などの食物類
や家具類を納めておく棟。

dgo: gutfi (門)

jafiki (屋敷)

jantʃidgi (屋根)「屋の頂」という表現。

屋根全体をおさえている頂の部分は?ikkja
という。

çija (屋根の棟からひさしまでの間の部分)

çijanu Fuki nīgattī (屋根が風で吹きとばされた)

juka (床)

do: ka (床の一種) 台所など水を使う
場所で、竹で編んだ床の部分进行う。水が床
下にもれていくように考案されたもの。

下に流れ落ちる下水のことを damīdzī とい
う。

(9) 道具関係の語彙

?ita (板)

?irigo: (入れ物)

?usi (臼)

ʃikjusī (搗き臼)

surisī (磨り臼) sirusī ともいう。

もみがらをとったりする臼。

sīkjusī (ひき臼) 穀粒などをひいて粉
にするための石臼。

m?agkusa (馬の草)

?ufigkusa (牛の草)

m?antarē: (馬の飼葉桶)

?usīntarē: (牛の飼葉桶)

m?agkura: (馬の鞍)

?usiḡkura: (牛の鞍)

?umugi (馬の轡)

hanadzina (鼻繩)

?o: gi (扇)

wē: (桶)

ʃagi: (手桶)

taggu (四斗ぐらいの桶)

kju: wē: (肥桶)

wunu (斧)「まさかり」の意。

natawun (小斧)

kagan (鏡)
 magu (籠) 浦上では mago という。
 mo:i: (緒のついた籠) sagimagu: も
 ほぼ同じもの。
 katana (刀)
 kanadgitfi: (金槌)
 kī: do: (木で作った槌)
 bango: (鍛冶屋が使う鎚)
 hamma: (ハンマー)
 kama (鎌)
 kusakaigama (草刈鎌)
 nʔikaigama (稲刈鎌)
 hagama (釜) ごはんを炊くもの。
 kama (かまど) 「地炉」にあたる dgiju も
 かまどの意味で用いられる。
 kamagi (かます)
 sui (かみそり)
 kamī (甕) 甕や壺の総称。
 handu: (水甕・大きいもの) midzī
 handu: ともいう。
 沖繩では、「壺」にあたる tʃibu は「杯」
 の意になっている。
 kana (鉋)
 ʔadzin (杵)
 ʔadzin tsitsi: (杵をつく)
 tʃitʃi: (杵・搗き杵)
 ʔi: tʃe: (錐)
 ʔi: tʃe: ʃi mī: Fugafi (錐で穴を
 あける)
 kʷi: (杭) kʷē: ともいう。浦上では
 kʷēgi という。
 kanikugi (釘) 「金釘」という表現。
 dē: kugi (竹釘) などの対比による表現。
 toggwē: (鉋)
 bittʃu: kkwa (備中鉋) to: tʃimun

ともいった。
 kju: wē: (こえたご)
 nidʒiki (莫座)
 gomitori (ごみとり)
 getta (ゴム)
 kīmun (材木)
 so: (竿)
 tʃuku (杯) 「ちよく・猪口」に対応する語。
 沖繩の tʃibu (杯) は「壺」に対応する。
 sadʒi (匙) 新しい移入語。
 sara (皿) hondzara, tʃu: dzara,
 kodzara の順に大・中・小の皿をさす。
 so: kī (ざる) 「目のあらいもの」をさす。
 tēru (ざる) tēnno: は「ざるにつける
 縄」の意。tīnnu: ともいう。
 sīkaidzīna は「背負いざるの背負い縄」
 のことである。
 sakufi (杓子)
 mīsige: (めし杓子) 「飯杓子」の中で
 も大きいものを、とくに ʔibura: という。
 これは「飯へら」に対応する語である。
 ʃirudzakufi (汁杓子) これはお汁を入
 れるものであるが、お粥を入れるものをとく
 に kaidzakufi という。
 dzu: baku (重箱)
 dʒo: gu (じょうご)
 midzīguruma: (水車)
 siki (鋤)
 dzatsi (炭俵)
 dzatsi ʔan (炭俵を編む)
 sīrukuki (すりこぎ) 浦上では sīrukugi
 という。
 sīruhatʃi (すりばち)
 kafikjuwī: (せいろ・蒸籠)
 kafikju は kafikjui (蒸す) と同根。

kafiki は「おこわ」のこと。ʔamamĩ :
gafiki は「赤飯」のこと。wĩ : は「桶」
に対応する語で wukĩ → wuxĩ → wẽ : →
wĩ : の変化を経たものである。kafikju
wĩ : は「むし桶」という表現である。

kantara (石油燈) 皿のような容器の上で
石油をもやして明りをとる。オランダ語のカ
ンテラ (kandelaar) からの移入語である。

ʃaFun (石けん) 「しゃぼん」に対応する
語である。ポルトガル語の sabão からの移
入語である。

ʔodzen (膳) 標準語的な表現。

dzo : kin (雑巾)

dakkokki (脱穀機)

tikuda : (竹で作った脱穀機的一种。)

kanikuda (金で作った脱穀機的一种。)

tarẽ : (盥)

warado : ra (たわし) 現在、市販されてい
るものは tawafi というが、昔は自家製の
藁で作ったものがあつた。これが warado :
ra である。

tansi (たんす)

sĩtsĩ (長持ち) jaFu は沖縄から入っ
てきた長持ちのようなもの。衣類入れに用いる。

tʃadẽ : (茶台)

ʃukudẽ : (机)

tsĩna : (綱) 「繩」のことにもいう。

waradzĩna (藁縄)

tsʔigudzĩna (棕櫚縄)

tsuruhafi (つるはし) 新しい移入語。

tĩ : ʔĩrĩ (手入れ)

tĩgana (てこ)

tippo : (鉄砲)

ʔo : ku : (天秤棒)

tʔai ʔo : ku : (荷を中にして棒を通して

二人でかつぐときの、かつぎ方)

tukui (徳利)

saggo : tukui (三合徳利)

jamamutʃi (とりもち)

kanto : mai (どんぶりばち) 広東から沖
縄を経て伝わってきたところから「広東碗」
という表現をとっている。

nabĩ (鍋)

nabĩ xĩguru (鍋ずみ) 昔は夜道など
を行くとき、魂を悪魔にうばわれないよう
にと、赤坊などの額に鍋ずみをつける風習があ
つた。

nabĩ ʔĩsĩ : (鍋敷) ʔĩsĩ : は「坐(あ
す)」に対応する語で、「坐させる」という表
現である。「置く」ことに「坐させる」とい
う表現をとっている。

mẽ : ʃikĩ : (たきぎ) 「もやし木」とい
う表現をとっている。

ʔuduru : (小枝) 浦上では ʔudzuru と
いう。

murubo : kĩ : (薪) 「そだ」のこと。
枝のままで割ってない木をいう。maruta
(丸太)。浦上では「薪」のことを ʔinai
dakkwa という。

ʧidzi : (もえさし) sumi (すみ)

tandzĩn (すみ火) hai (灰) ʔaku
(あく)

dziju (地炉) dzijubẽ : (地炉灰)

no : gi : (鋸)

no : gĩgkusu (おが屑) 「鋸の糞」という
表現である。

nun (鑿)

nui (糊)

hai kaki (灰搔)

ha : i (秤)

k[?]immi (秤の目方)
haku (箱)
hasan (鋏)
timutu (箸) hajiも用いるようになった。
これは標準語からの移入語。
hatji (鉢)
hai (針)
hainumi: (針の穴)
jujugani (針金)
nibu (ひしゃく)
çinofi (火のし)
çibatji (火鉢) 普通は çibaku という。
Fukin (布巾)
Fukuru (袋)
Futa (蓋)
nabïnu Futa (鍋の蓋)
?udu (ふとん) 最近では Futun ともいう。
「座ぶとん」のことは dzabutun という。
jui (ふるい・篩) 大きいもの。
tabu (米ぬかをふるい分けるための篩)
?utjikui (ふろしき) 最近では Furufiki と
いう。
Fira (へら) 芋を植えるために使う農具の
一種。壁を塗るためのへらは kuti という。
ho: ki (箒)
ho: tja: (庖丁)
bo: (棒)
bun (盆)
makura (枕)
maga (馬鋏)
ts[?]i'ga (杵)
gugo: ts'i'ga (五合杵)
?i'fo: masi (一升杵)
浦上では k[?]jo: ban (一升杵) というもの
があり、沖縄の tfo: ban に対応する。

maratja (まな板) 浦上では mara ?ita
という。沖縄では maratja という。
dantsikigi (マッチ)
hara (箕) 円形のもの。
浦上では sambara という。
mugiwara (麦藁)
muffu: (簗)
「莫藁」は nidgiki という。これは「寝敷」
に対応する。
muffu ?utji (簗を編む)
?o: da (もっこ)
ts'ina ?o: da (縄で作ったもっこ)
të: ?o: da (竹で作ったもっこ)
mono safi (物差し)
ja: (矢) 浦上では ?ja: という。
?i: kurufi (射殺す)
jumi (弓)
t'fuka: (湯わかし)「鉄瓶」や「やかん」の
こと。「急須」のことは、とくに dafit'fuka:
ということもある。dafi とは、茶を客に出
すということであり、そこからの表現である。
dampo: (ランプ)
Funadampo: (外出用のランプ)
çu: suku (燈)
kasadampo: (笠ランプ) 芯の巾によって
sambudampo: , nibudampo: , gobuda
mpo: などがある。
dampunu Fuja (ランプの火屋)
ro: soku (ろうそく)
mai (碗)
firumai (お汁を入れる碗)
kaimai (ごはんを入れる碗) 昔、お粥が
米飯としての常食であった頃の表現の名残り
であろう。かたいごはんを入れるときにもい
う。

naratʃa (吸物を入れるもの)

tʃadʒawan (湯のみ)

ʔan (網)

nage: ʔan (遠網)

ʔansikjata: (底引き網)

ʔikjabiki (烏賊釣り)

kanagu (錨)

ʔuki (浮標)

ju: (櫂)

sindu (船頭)

tumu (鱸) 浦上では tomo という。

ʔiguraku (びく・魚籠)

浦上では ʔjumago という。

Funi (舟)

kasu: buni (輕船)

ʔumuti (舢舨) 浦上では ʔomote または mijofe という。

Fu: (帆)

Funin Fu: (舟の帆)

tugja (もり・鋸)

ʔitsi (漁) 浦上では ʔitsiriともいうが、

ʔifo fun (漁をする), ʔifo si: ga
(漁をしに)ともいう。ʔifo は磯であろ
う。

ʔifufa: (漁師) 「磯をする人」という表
現をとっている。

ru: (櫓)

(10) 労働関係の語彙

ʃikimun (あんま)「肩もみ」という表現。

ʔifa (医者) ʔifasama: (お医者様)
が普通の表現である。

nʔikai (稲刈り)

nʔiFuʃi (稲乾し)

ʔutsiki (植え付け)

ʔutsikigjo: i (植え付け時期) 3・4月
頃。

ʔunë (畝)

makë (おまけ) makëri (まけろ)

ʔitu (かけ声・労働のかけ声)

kadʒija (鍛冶屋)

kanï (金)

buginfa: (金持) kanï mutʃi ともいう。

kaifa: (狩り・狩人)

jo: ʃaduki (飢饉の時期)

空腹の時期。旧暦の4・5月頃をいう。蘇鉄
の実や芯を食べつくす頃でもあった。

jo: ʃa dusi (飢饉の年) jo: ʃaは「ひ
もじい」という意。

jamaʃi (きこり) 浦上では jamaʃa とい
う。

ʔusidusi (凶作・不作の年)

dziŋkanï (金銭)

一銭以下を dzin, 一銭以上を kanï という。

kusatu (草取り)

kusui ja: (薬屋)

gekkju: (月給)

tsukuju: (小作)

tsukuju: ʃuntʃu (小作人)

浦上では tsukuri wë: (小作)といい、
「作り分け」という表現をとっている。

murë: (乞食) 「もらい」という表現をと
っている。

tsikë: ganï (小遣錢)

kumi ja: (米屋)

ʃutë: (財産)「世帯」という表現をとつ
ている。

tsukui mun (作物)

sa: ta: ʃi: (砂糖製造) 「砂糖為」という表現をとっている。

sa: ta: ts'ikui wui (砂糖製造の時期)
だいたい12月から1月にかけて行なわれる。
waku (仕事の総称) kakuは陸仕事の総称ではあるが、海仕事は含まれない。「共同作業」は ʔujawaku といい、「労働交換」による仕事は juiwaku という。

「夜なべ」は wunabi という。

wakumudui miʃija jut'i (仕事帰りに店による)

最近では、ʃigutu (仕事)もよく使われるようになった。

ʃitaku (支度)

dʒinufi (地主)

harë: (借金) 「払い」という表現。

harë: mutʃi (借金の多い人) 最近では、ʔudzai (負債)ともいう。

ʃo: bai nin (商人)

ʔudʒi ju: (しろかき)

ta: ʔui (田植え)

ta: kadi (田起こし) kadi は「耕す」意である。

dëmpata (田畑)

së: ku (大工)

tsumigwë: (堆肥)

tani ʔurufi (種蒔) 「種おろし」という表現である。

tam'iki (溜池)

to: ra (俵)

tsui (釣り銭)

kafë: (手伝い・加勢)

t'i: narë: (手習い・学校へ通うこと)

t'i: narë: hadzimi (手習いはじめ学校への通いはじめ)

çima (手間・暇)

nai (苗) 浦上では në という。

no: ʃi (苗代)

simu: (鳴子) 害鳥・猪などを追い払うためにたてたもの。

浦上では s'imë とも、simu ともいう。

sita: (難儀) ʔakusë: ともいう。

sita: ʃan (難儀した)

ʔakusë: ʃan (難儀した)

nëdan (値段)

no: gjo: (農業)

dgu: rija: (飲み屋)

hatë: (畑) 庭にある菜園は ʔatai という。

hanadzina (鼻とり)

harë: (払い) ʃibarë: (支払い)

jatui (日雇い)

kwë: (肥料)

mʔagkusu: (馬肥)

çindʒagkusu: (山羊肥)

bimbo: (貧乏)

mʔaridufi (豊年) 「生まれ」という語は豊作をあらわす。稲が豊作であるのは mʔari nʔi という。

madu ʔwi (間のあるところに植えること)

kʔwa: sagkʔurafi (貧しい暮し)

kʔwa: sa: ntʃʔu (貧しい人)

mabiki (間引き)

miʃija (店)

mugi maki (麦蒔)

mutʃi: tsiki (餅つき)

jaduja (宿屋)

ja: n nufi (家主)

wunabi (夜なべ)

juiwaku (労働交換)

浦上では j'i: waku という。

waku は tawaku (田仕事), jamawaku (山仕事) のような造語ができる。

jama (罌)

jama ʔagi (罌をかける者)

(11) 祭遊関係の語彙

wukidgai (祭りの総称)

to : toganafi (祈るときの言葉)

「尊加那志」に対応する語で、沖縄のアートウトウと同じ表現。

kansama (神) 「神様」という表現。

kimmun (ばけもの)

tʃʔudama (人魂)

ɕidama (火魂)

ʔamagui (雨乞い)

fo : gwatsi (正月)

kadomatsi (門松)

gwantan (元旦) gwandzitsi ともいう。

wakamidzi (若水)

ʔotojidama (お年玉)

ɕigan (彼岸)

sagatsi santsi (三月三日)

hatsu mʔani : (初午の日の祭り)

4月の初午の日に、ハブにかまれないように祈願する祭り。「浜下り」は na : hama

ʔuri と、ʔatu hama ʔuri とがある。

gugwatsi gunitsi (五月五日)

nʔikure : (豊作を祈願する祭り)

6月のひのえねの日に行なう。稲の穂をとってきて、耳・肩・頭の上に米粒を置いて祈願する。「稲くらい」に対応する語。

kafamutʃi : (ちまきのような餅を七月につくる)

sitsigwa : (火の安全を祈願する祭り)

7月のひのえねの日に行なう。

ʔujaFudgi matsui (お盆) 「先祖の祭り」という表現。

ʔarasitsi (八月の豊年祭) ひのえの日に行なわれる。その7日後に sibasasi の祭りがある。これは、家屋の四角に to : dzi tsiki : をさして魔除けとする。御酒も作る。

dugga (九月の祭り) 一年中の祭りの終わりという意である。

tufi tui (大晦日)

tufi tui juru : (大晦日の夜) ともいう。「年取り夜」という表現。

ʔixë : (位牌)

haka (墓)

hakamo : i (墓参り)

dzigoku (地獄)

gokuraku (極楽)

so : fiki (葬式)

kwaso : (火葬)

dgi so : (土葬) 「地葬」という表現。

tudgi kamë : (結婚する)

「離婚する」ことは、ʔa : ri という。再婚については、男性は nidutudgi (二度妻)、女性は nidu ja : (二度家) をもつというふうに表示する。

tudgi kamë : ju : we : (結婚式)

saggo : dë : (結納・三合酒)

ʔiça (木切れ様のものを打って飛ばして遊ぶもの) 浦上では ʔiha ʔutsi という。

ʔuta (歌)

奄美には次のような歌がある。ʔasabana : , ʃundʒofu : , kurudando : , ʔukumidzi :

jamatuma, ʔurĩgutʃiː, turasanna
 ganĩː, sībajaduː など。
 kakimun (絵)
 jempitsĩ (鉛筆)
 ʔofitotsĩ (お手玉) オヒツオトシテオ
 ーサーラー, オフタツオトシテ……と言いな
 がら遊んだ。
 tumĩːgoː (かくれんぼ)
 浦上では xēːkkoː という。
 bakutʃi (かけごと一般)
 hafijēː (かけっこ) hafiːfuːbu (走
 り勝負)ともいう。浦上では hasĩri kʔu
 ma という。
 ʃĩgei (片足とび)
 ʃĩgei ʃun (片足とびをする)
 ʃĩgei ʃutĩ sĩroː (片足とびをしよう)
 ʧĩdʒidekkoː (片足とびをしながら、腕で
 互いに相手を押しかう遊び)
 dʒaraː (肩車)
 浦上では tamma という。
 karuwada (軽業)
 kʔudʒi (くじ・籤)
 ʔifoːbiki (口笛)
 kĩːkoː (稽古)
 kuːruː (こま)
 kuːruːnu moːjui (こまがまわる)
 sanʃiru (三味線)
 mjaːʧijēː (潮干狩)
 mugĩ tui (はまぐり取り)
 ʃibajaː (芝居する人)
 buʃa (じゃんけん)
 buʃa sĩroː (じゃんけんしょう)
 buʃa は親指・人差し指・小指で競い合う。
 親指と人差し指とは親指が勝ち、人差し指と
 小指とは人差し指が勝ち、小指と親指とでは

小指が勝つ、というルールで遊ぶ。
 ʔuigiː (水泳)
 sudzĩ ʔiʃi (硯)
 ʃibaharakoː (すべって遊ぶところ)
 すべり台のかわりに、野原の草の上ですべっ
 て遊ぶところがあった。
 siniː (墨) 浦上では sĩmi という。
 sumoː (相撲)
 tsĩdzĩn (太鼓・つづみ)
 taːʃaː (竹馬)
 浦上では ʔaʃosa といい、木で作ったもので
 あった。
 takoː (凧)
 takoː ʔagi (凧をあげる)
 tsĩna kagajēː (綱引き)
 dʒoː (手紙)
 tsĩnatubi (なわとび)
 nun (木の先をとがらして、倒し合って遊ぶ
 もの。浦上では nēn という。
 tʃʔuggwaː (人形)
 浦上では miŋgjoː という。
 tĩdanukun (ひなたぼっこ)「太陽ぬくみ」
 という表現をとっている。
 Fudĩ (筆)
 muŋkaraː (ままごと)
 muŋkaraː sĩroː (ままごとをしよう)
 muŋkaraː ʃiːmun (おもちゃ)
 jiːmun ともいう。
 maruː (毬)
 毬は蘇鉄の花の中にある実を包んでいる綿の
 ようなやわらかいもので作った。これを探り
 集めて糸で円く巻いて作った。綿のようなや
 わらかいものを, haːma という。
 maruː nagijēː (まり投げ)
 miǰzimugakai (水いたずら)

karuta (かるた)

karuta ?utʃi (めんこ)

kakī: (ゆびきり)

kakī: sīro: (ゆびきりしよう)

語彙その2. 動詞語彙

(1) 動静の語彙

○ゆれうごき

うごく

mī: gko: nu dugē: tī (まぶたがうごく)

Funīnu dugē: (舟がうごく・ゆれる)

舟が走る場合には, Funī harafi (舟を走らせよ) という。

fu: nu dugētī (潮がうごく) 波には言わない。

tʃʔunu dugē: tun (人がうごいている)

du: dugē: rafi (体をうごかしている)

?ifi to: tī dugē: ran (石のようにうごかない)

kutʃi dugē: rafi (口をうごかす)

湯灣では「うごく」は dugē: jui, dugē: jun を用いる。これは、「ひとりでに動く」意味がつよい。

ゆれる

kī: nha: nu dugē: tī (木の葉がゆれる)

tīnuguinu dugē: jun (てぬぐいが風にゆれる)

ja: nu kadzīʃi dugētī (家が風でゆれる) 家の場合は dugētī より, nē: jun のほうがよい。

nʔin fu: nu dugē: tī (稲穂がゆれる)

「ぶらんこがゆれる」は ?itatsikē: ʃi: といって, dugē: jun を用いない。

ゆする・ゆすぶる

tsibufi dugē: rafi (膝をゆする)

kī: wubi (木をゆする)

kī: wubui ?utufi (木をゆすり落とす)

「ゆする」には wubujun という。

ふる

hata Fui (旗をふる)

kʔubi Fui (首をふる)

tī: Fui, Fujun (手をふる)

「手まねき」は tīmagkī という。沖繩ではティーマルチという。

ふるえる

qigju: sanu gata: gata Furitī

(Furījun) (寒くてがたがたふるえる)

kuinu Furitī (声がふるえる)

はねる

?usaginu wudujun (兎がはねる)

?junu wudujun (魚がはねる)

gatta: nu tubjun (バッタがはねる)

duru hanitī (hanījui) (泥をはねる)

兎や魚がとびはねることは, wudujun (踊る) で表現する。バッタは wudujun とは言えない。tubjun という。泥や水は hanījun という。

○まえすすみ・あとずさり・あらわれ・かくれ

すすむ

mě: katʃi ʔaiki (ʔaikjui) (前にすすむ)

Funinu hajui (舟がすすむ)

「すすむ」に相当する表現は、具体的場面によって細分化され、人間ならば一般的に ʔaikjui (歩く) を用い、舟ならば hajui (走る) を用いる。

あとずさりする

ʔufiju ʔaiki: (あとずさりをする) 「後あるき」という表現。

あらわれる

habunu ʔidgitan (蛇があらわれた)

ʃifinu ʔidgitan (猪があらわれた)

tsiranai ʔidgitan (顔にあらわれた)

「あらわれる」に相当する表現には、ʔidgijui (出る) を用いるのが普通である。蛇などは hautun (這っている) haujun (這う) を用いることもある。

ばれる

siro: nu ʃiritan (嘘がばれた)

ʃirijui (知れる) ʃiritan (知れた) で表現している。

ひっこむ

ja: nan kakuritui (家にひっこんでいる)

kakurijui (隠れる) で表現している。

nětsi ʧikkumatʃan (熱がひっこんだ)

ʔatadan ti: ʧitʃan (急に手をひいた)

かくれる

tsikinu kʔumu katʃi kakuritan (月が雲にかくれた)

warabinu kinfa katʃi kakuritan (子

供が木の蔭にかくれた)

nusidunu kakuri tui (どろぼうがかくれている)

「かくれんぼ」のことは tumi: go: という。tumi: は「さがす」の意味をあらわしている。

○いきき

いく

gakko katʃi ʔikjui (学校へいく)

nadze katʃi ʔikjo: (名瀬へいこう)

du: nu ʃima kara ʔikjo: (自分の故郷を出よう)

ʔantsuja tu: sa katʃi ʔidga (あの人は遠くへいった)

bjo: in katʃi hafijë: ʃi ʔiki (病院へかけつける・走っていく)

「むかう」「さる」は、いずれも ʔikjui (行く) で表現している。

ʔiki saki (行き先)

それる

të: Fu: nu tu: i siḍgan (台風が通りすぎた)

jumijanu ʔataran (弓矢が当たらない)

「台風」や「弓矢」が「それる」に相当する表現は、「来なかった」とか「当たらなかった」とか言うだけである。

はなれる

ja: kara ʔidgiti (家から出る)

si: kara hanari: (巣からはなれる)

ʔifigaki hanari tan (石垣からはなれた)

jumi ʔi: (弓を射る)

鳥などが巣からはなれ、巣にもどれなくて迷

っていることには、dumagurī という。

人間でも、友人と出かけたが、帰りにははぐれてひとりになってしまうような場合には、dumagurī という。山道などで迷うことは、mitʃimadē: (道迷い) という。ひとりで放浪している人は、ho: ra: という。

とおのく

ʃi: tʃugkja: nu nutʃan (親しい人たちがはなれた)

tudʒutu: ʔa: ri (夫婦が別れる・離縁する)

親しく交わっていた人がはなれることは、nukjun (退く) (nukjumī 退くか) で表現する。

tudʒutu: は、tudʒi (妻) と wutu が複合したもの。妻が夫より先に置かれることは、日本古代語の造語法に通じている点である。

ʔa: ri は、古語の「あかる」に対応する語である。

どく

suba katʃi jurī (傍にどけ)

ʔisu no: si (椅子をどけろ)

ʔufi tsinagi no: si (牛をつなぎなおせ)

「どく」に相当する表現は、jurī (寄れ) no: si (直せ) などである。

「へだたる」については答が得られなかった。

くる

ʔinunu tʃʔan (犬がきた)

warabīnu tʃʔan (子供がきた)

tsʔunu ʔumoi (人がいらっしゃる)

ta: ʔunnu tʃikjaku natī (田植の時期が

近くなる)

tigaminu tʃʔan (手紙がきた)

「くる」は kjui, kjun (kjumī 来るか, tʃʔan 来た, tʃʔina 来たか) であるが、敬語の「いらっしゃる」は ʔumoi (ʔumo: jumī いらっしゃいますか) である。kjui (来る) は、人間や動物の移動をあらわすときに用いられ、「～の時期がくる」のような文脈では用いられない。ただし、補助動詞的に用いられる場合には、その限りではない。

つく

Funīnu tsikjun (舟がつく)

ja: katʃi tsitʃan (家についた)

くつつく

mutʃi: nu mutsikati (餅がくつつく)

kʔwanu muʃi: sagati (子供がくつつく)

mutsikajui は、餅などねばり気のあるものが手などにくつつくことをあらわしている。

muʃi: sagajui は、子供などが親にあまえてくつついていることをあらわす。

ちかづく

Funīnu tʃikjaku natī (舟がちかづく)

ʃo: gwatsīnu tʃikjaku natī ku: ti nasa (お正月がちかづいて忙しい)

よる

mitʃinsuba: katʃi jurī (道の傍によれ)

wakumudui mifija jutī (仕事帰りに店による)

muʃinu mi: turatti dampo: katʃi

ʔatʃimajun (虫が眩惑されてランプに集まる)

mīmajū ʃikjamatʃi (眉をよせる・しかめる) 「眉をしかめる」は比喩的な用法としては用いられない。

tʃʔummē: katʃi jutī (人のところによる)

おしよせる

naminu ʔutʃiʔagi (波がおしよせる)

いらっしゃる

ʔifasama: nu ʔamakara ʔumo: jun

(お医者さんがむこうからいらっしゃる)

kumanan ʔimo: jui (ここにいらっしゃる)

kuma katʃi ʔimo: rī (ここへいらっしゃい)

「いらっしゃる」は ʔumo: jui, ʔumo:

jun と、ʔimo: jui, ʔimo: jun ともい

う。「居る」「来る」の敬語である。

うかがう

na: kja: mē: katʃi ʔikjussiga (あなたの家にうかがいますから)

wugaŋgja kja: ussiga (うかがいにまいりますから)

おしかける

dʒanasantʃunu kjui (大勢の人がおしかける) 「来る」という表現。

もどる

mutunu mitʃi mudujun (もとの道をもどる)

ja: katʃi muduro: (家にもどろう)

mutunuja: katʃi muduro: (実家にもどろう)

かえる

ja: katʃi mudujun (家にかえる)

du: nu ʃima katʃi mudui (自分の田舎にかえる)

「かえる」は、ほとんど mudujun で表現される。

ひきかえす

ʔatumudui ʃan (途中からひきかえした)

「後もど里した」という表現。

mutumitʃi mudujun (もとの道をひきかえす) 「もどる」という表現が用いられる。

「うしろ歩き」に相当する表現は、kuʃi ʔaiki: という。kuʃi は「腰」に対応する語であるが、「背中・うしろ」の意をあらわす。

ひきあげる

jamatu katʃi ʔutsui (内地<大和>へひきあげる) 「移る」に対応する ʔutsui (ʔutsutan 移った) という表現を用いる。

まわる

gadʒamo: ʃa: mo: ʃi (風車をまわせ)

jittʃa mo: jun (良くまわる)

ta: ma: jun (田をまわる)

「まわる」は mo: jun (mo: jumī まわるか)とも、ma: jun ともいう。

かよう

gakko: kajui (学校かよう) ʔikikajui (行き通い)ともいう。「行ったり来たり」は ʔidʒaitʃai という。

ちる

hananu tʃʔirījun (花がちる)

sĩnnu tʃʔiriiti (墨がちる) ɕu: gai,
ɕu: gati (広がる)ともいう。

さまよう

mitʃimadẽ: ʃun (山をさまよう) 「道
迷いをする」という表現。

○のぼりおり

のぼる

juwan jama katʃi nubujui (湯湾山へ
のぼる)

kĩ: katʃi nubui (木にのぼる)

ja: n tʃidʒi katʃi nubui (家の屋根
にのぼる)

ɕija katʃi nubui (坂をのぼる) 「坂へ
のぼる」という表現。

のる

mʔa nan nui (馬にのる) mʔanui (馬
のり)

basu nan nui (バスにのる)

Funĩ nan nui (舟にのる)

dai nan nui (台にのる) 「台」のこと
を ʔaʃitsĩgiともいう。nanは「中に」に対応。

格助詞の nan (に) と katʃi (へ) とが明
確に区別されている点は湯湾の特色である。
川平では「に」の場合も he: (へ) を用いて、
umahe: nurun (馬にのる) という。

あがる

nikai katʃi nubui (二階にあがる)

ja: katʃi nubuti mʔo: ri (家にあが
ってください) ʔumuti ʔutʃi mʔo: ri
(内にお入りください) が自然な表現。

ʔagi katʃi ʔagari (陸にあがれ)

ʃo: gakkō: katʃi ʔidʒihadʒimi (小
学校にあがる) 「出はじめる」で表現する
のであり、「あがる」を用いない。

gakkō: sotsugjo: ʃun (学校を卒業す
る)

gakkō: ʔagai は、「上級生になる」こ
とをあらわす。

ʃigutu ʔagajun (仕事をあがる) 「終わ
る」ということをあらわす。

mununu ta: ku nati (物価があがる)
nĩtsĩnu tʃʔusa (熱があがる) 「強い」
という表現。

mʔatsĩnuhananu ʔagati (火の手があがる)
kĩbufinu ʔidʒijun (煙があがる) 「出
る」という表現。

やむ

ʔamĩnu hariiti (雨がやむ) 「晴れる」
という表現。

watajannju tumati (腹痛がやむ) 「止
まる」という表現。

ju: kurisakẽ: ʃigutu jamĩtan (日が
暮れる頃に仕事をやめる)

かかげる

ɕinomarunu hataba muttʃi (日の丸の
旗をかかげる) tatĩti (たてる)ともい
う。

うく

Funĩnu ʔutʃui (舟がうく)

「雲」は「うく」を用いない。kumunu sa
gati (雲がさがる)といえ、雨が降るとき
の雲の状態をいい、kumunu ʔagati (雲が

あがる)といえ、天氣の良いときの雲の状態をいう。

○たちい

ある

dzĩnnu ʔan (金がある)

wukidgainu ʔan (お祭りがある)

ʔan と ʔai の両形がある。

いる

ʔamma: ga wui (母がいる)

ʔinnu wui (犬がいる)

wui と wun の両形がある。

たつ

tʃʔunu tattʃun (人がたっている)

kĩbũfinu ʔidzĩjui (煙がたつ) 「出る」

という表現。

ʔutunu ʃun (音がする)

Furo: taki (風呂をたてる)

ja: tatĩ (家をたてる)

すわる

tatamĩnu ʔuinan ʔi: (畳の上にすわる)

ʔi: の終止形として ʔjui, ʔjun (ʔjumĩ

すわるか)がある。

かがむ

kũfi magĩ (背中をまげる・かがめる)

kũfimaga ja: は「背中のまがっている人」をあらわす。

つまさきだち

ta: ʃa: ʃun (爪先だちをする)

ta: ʃa: ʔaiki: (爪先で歩く)

ta: ʃa: は「爪先だち」のことであるが、竹馬をも指す。

ひったてる

dgunsasannu nusudu: ba tsĩrĩtĩ ʔiki

(巡査さんがどろぼうをひったてていく)

すべる

mitʃi nan tĩ nabijumĩkafĩ (道ですべる) nabijumĩkafun, nabijusa: n (すべっこい)ともいう。

はう

ʔa: kwanu hau ʔidgitan (赤ちゃんがはいだした) haujukja: ta (はいはじめた) habunu hautĩ kju: i (蛇がはってきた)

あるく

ʔu: mata: ʃi ʔaikjui (大股であるく)

いそぐ

gakko: katʃi ʃo: madẽ: ʃi ʔiki (学校へいそいでいく)

xẽ: ku xĩ: rĩ (いそいで起きる) xẽ: ku (早く)で表現している。

はしる

hafijẽ: ʃun (はしる・競走する)

hafi: ʃu: bu ともいう。

かける

mʔan hafi: (馬がかかる)

hafi: ʃu: bu (かけっこ)「走り勝負」という表現をとっている。

とぶ

tuinu tudgi (鳥がとんでいる)

ʃu:n Fë: nu makitʃija: ʃun (しぶ
きがとぶ)

およぐ

?junu ?uigi: (魚がおよぐ)

ころがる

tamanu mo: jui (玉がころがる)

?inukkwanu kē: i: ʃui (仔犬がころがっ
ている)

warabīnu kē: i: ʃun (子供がころがって
いる) kugē: i: ʃun ともいう。

ku: ru: nu mo: jui (こまがまわる)

ころぶ

kubundga: mitʃi nan ti hagkē: ta
(でこぼこ道でころんだ) 終止形は hagkē:
jui という。

たおれる

kī: nu nīgu: rīʃan (木がたおれた)
nīgu: rīʃunは、根元から枯れて「倒れる」
意味をもつ。

kī: to: ʃi (木をたおす) to: ʃiは伐
採によってたおすことである。

つまづく

?iʃi nan kīimatsībui (石につまづく)
終止形は kīimatsībujunという。kīiは
「蹴り」、matsībujunは「もつれる」
「まつわりつく」などの意味をあらわす。

ひっくりかえる

Funīnu kuburī ta (舟がひっくりかえっ
た) kuburī juiは舟だけに用いられる。
人間は hagkē: jui という。

tʃawan kē: rafi (茶碗をひっくりかえす)
tsību kʷugē: rafi (壺をひっくりかえす)
kʷugē: rafiは、重く大きいものをひく
りかえすときにいう。

くじく

hagī nē: tʃa(n) (足をくじいた)
終止形は nē: ʃuiという。
kʷubi nībui wui (首をねちがえる)

よろける

?iʃi nan kīimatsībūtī (石につまず
く) haggē: rottʃi | ʃa: (ころぼうと
した)ともいう。
sē: nudi ?ado: rī ?aiki: ʃui (酒を
飲んでよろめき歩きをしている) sē: nudi
Fumīkatʃi (酒を飲んで酔っている)
Fumīkatʃiは「身体があたたまってくる」
ことをあらわす。

こもる

kībūʃi nu kudī (煙がこもる)
ja: nan kumutī (家にこもる)

うまる

ʃi: munnu mitʃabo: natan (おもちゃ
が泥だらけになった)

とまる

tʃʷunu tatʃamatun (人がたちどまって
いる) tatʃamajunは多勢の人が立って人
垣を作っていることをあらわす。

tatfidumajun という語もあるが、新しい。
nagarigo: nu tumajun (流れがとまる)
judumjun ともいう。

ko: tfiki: fun (川をせきとめる)
tfikijui (せきとめる)ともいう。
basunu tumatan (バスがとまった)
kusaFuruinu tumati (ふるえがとまる)
midzīnu tumati (水がとまる)

ながれる
ko: nu nagari (川がながれる)
nagarigo (流れ川)
kimunnu nagari (材木がながれる)
mī:Futfē: kara pasīnu nagari ti
(額から汗がながれる) 汗は hati, hajui
ともいう。
ko: nu ?un katfi nagari (川が海にな
がれる)

もる
tfuka kara midzīnu mujui (急須から
水がもる)
ja: nu mujui (屋根がもる)

にじむ
tf?i: nu Fukja: Fukja: fui (血がに
じんできた)

しみる
?igkinu sīmjuī (インキがしみる)
mī: nu sīmīti (目がしみる)
ha: nu k?irijan fui (歯がしみる)

ぬれる
?amīni dzippui nurījui (雨にずぶぬ

れになる)

つかる
midzī nan tsikajui (水につかる)
ja: nu midzī nan tsikati (家が水に
つかる)
k?ubi gadi ju: nan tsikati (首まで
湯につかる)

さす
?abura safi (油をさす)
mīgusui safi (目薬をさす)

つぐ
tfuku nan sē: tsīgi (杯に酒をつぐ)
終止形は tsīgjun という。

こぼす
tfa: kubufi (お茶をこぼす)
sata: ba kubufi (砂糖をこぼす)
mifiba kubutfi (ごはんをこぼして)
「涙」は nada: ?utufi (涙をおとす)の
ように表現し、こぼすは用いない。
Futīgutu fui (愚痴をこぼす)

あふれる
midzīnu ?abirījui (水がバケツなどから
あふれる)
ko: nu midzīnu ?abirītan (川の水があ
ふれた)
「涙」は, nadanu ?utīti (涙がおちる)
と表現する。

○でいり

はいる

ja:nna: katʃi hə:ri (家の中へはいる)

ro: dʒipkwai katʃi hə:ri (老人会にはいる)

mĩntsĩ: nu ʔittʃi (目にごみがはいる)

いれる

Fukuru katʃi ʔiriiti (袋にいれる)

Fukuro: katʃi tẽ:ʔiriiti (ふところに手を入れる)

tʃa: ʔiriiti (お茶をいれる)

sata: ʔiriiri (砂糖をいれろ)

tʃuka: nan midzi ʔiriiti (急須に水をいれる)

mʔatʃi ʔiriiri (火をいれろ)

でる

sutu katʃi ʔidʒi bai (外へでる)

ja: kara ʔidʒi (家からでる)

nĩkunnu ʔidʒiti (にきびがでる)

tantsiki fun (咳がでる・咳をする)

nĩtsĩnu ʔidʒiti (熱がでる)

nadanu ʔutiiti (涙がでる)「落ちる」という表現。

mĩdzĩnu ʔidʒiti (水がでる)

ʔotsikisamanu ʔagatan (お月様がでた)「あがった」という表現。

だす

kani ʔidʒafi (金をだす)

fiba: ʔidʒatʃa (舌をだした)

dʒo: ʔidʒafi (手紙をだす) dʒo: は

「状」に対応する語である。

○つれだち

つれていく

ʔakĩnẽ: ʃi: ga tsuriiti ʔikjo: (買物につれていこう)

ʔin ba tsuriiti ʔiki (犬をつれていく) tsuriiti は tsĩriti ともいう。

やる

tsĩke: jaraʃi (つかいにやる)

tuinumun jaraʃi (鳥の餌をやる)

家畜に餌をやることは jaraʃi ともいうが、kamaʃi (食わす) と言うのが自然である。

ʔwa: mmun kamaʃi (豚の餌をやる)

ʔuʃinumun kamaʃi (牛の餌をやる)

çĩdʒa: mmun kamaʃi (山羊の餌をやる)

よこす

xĩnto: ʃi: (返事をする)

おくる

kytsĩtsĩmi ʔukui (小包をおくる)

tʃʔu Fu: i (人をおくる)

「葬式」のことも tʃʔu Fu: i (人送り) という。あの世へ送るということ。

jamatu Fu: i (日本旅へのおくり)

naha Fu: i (沖縄旅へのおくり)

とどける

mja: gĩ hagi (おみやげをくばる)

○もちはこび

おぶう

k^owa kasĩgĩ : (子をおぶう)

「子守り人」は k^owadakibě : という。

八重山川平の kasĩni と対応する語である。

おう

nĩ : kaggĩ (荷をおう) kaggĩjun は
背中におうことである。

かつぐ

mundo : ra katamĩ : (katamĩjui) (も
み俵をかつぐ) 「白米にした米俵」は
kumĩbju : という。

ʔo : ku katamĩ : (もっこをかつぐ)

「天秤棒」でかつぐことも ʔo : ku katamĩ :
という。二人で前後してかつぐことを、
t^ʔaiʔo : ku : という。

tʃ^ʔu katamĩ : (人をかつぐ) 怪我など
をして人をかついで運ぶことにいう。派生的
な「人をだます」などの意味はない。

sĩna katamĩ : (品物をかつぐ)

もつ

nĩ : tsĩdzimĩ (荷物をもつ)

mĩdzi tsĩdzimĩ (水をもつ) 手桶など
でもつ表現。

mĩdzi wagě : (水を腰にかかえもつ)

wagě : jun は水を桶などに入れて脇にか
かえもつようなもち方をする意である。

wagĩjui ともいう。

kanĩ mutʃi (金をもつ)

tudgi mutʃi (妻をもつ) 「夫をもつ」こ
とは ja : tatʃi という。

futě : mutʃi (家庭をもつ)

さげる

kaban sagĩjui (カバンをさげる)

tsĩdzimĩjui ともいう。

tʃo : tʃin sagĩĩ (提灯をさげる)

tĩnugui sagĩĩ (てぬぐいさげる)

はこぶ

mitʃa mutʃi (土をはこぶ)

のせる

kamatʃi nan kamĩ : (頭のにせる)

終止形は kamĩjui という。

nĩ : ba Funĩ nan tsĩmi : (荷を舟に
のせる)

(2) 変容の語彙

わる

garasu ʔutʃuwai (ガラスをわる) 終止形
は wajui, wajun という。

kĩ : wai (薪をわる)

dě : wai (竹をわる)

ʔampare : Fugĩtan (風船玉がわれた)

ʔampare : は、豚の胃袋をふくらましたも
のである。Fugĩjui は「穴があく」の意で
ある。

tamago wai (卵をわる)

tʃawan watan (茶碗をわった)

くだく

ʔĩʃi wai (石をわる)

mitʃa : kudaki (土をくだく)

kudakjui は、共通語的な表現。wajun が
普通に用いられる。

つぶす

mufi ɕiggi (虫をつぶす)

nikibinutani ndɕafi (にきびのたねをだす)

ja : nu ʔuse : ɕiggjɔta (家の屋根がつぶされた)

ɕiggjui (つぶす) ɕiggjarui (つぶされる)を多く用いる。

こわす

ja : nu kʔjo : rijui (家がこわれる)

dɕitenʃanu kʔjo : rijui (自転車がこわれる)

sara watan (皿をこわした)「割った」という表現。

haku kʔjo : ʃi (箱をこわす)

karada jamatʃan (体をこわした)

kʔjo : tʃan ともいう。jamatʃan は怪我を負うことにいう。

wata kʔjo : ʃui (腹をこわす)

くずす

jama kʔudɕiriti (山がくずれる) 終止形は kudɕirjui という。

mī : nu sagatan (穴がくずれてうまる)

jigawanu sadɕan (井戸がうまった)

kī : nu kudɕirīti (積木がくずれる)

tegkinu kawafi (天気が悪くなる)

kawafinu kjun (天気がくずれる)ともいう。kawafi は「風向き」がかわって天気に変化することをいう。良くなることにも悪くなることにもいう

やぶる

ʃo : dɕi jaburi (障子をやぶれ)

kabi jabui (紙をやぶる)

kʔin jabui (着物をやぶる)

nuimīnu jaburi (縫目からやぶれる)

さく

tiɕgoro : nu ʔutiti kī : nu saki

ʔa : sati (雷がおちて、木がさけた)

ta : nu ɕiwari ʔiditi (田が干あがってさけている)

jarigo : saki (ぼろ布をさく)

jarigo : は ʔundɕo : を作るためにぼろ布をさいた布切れをいう。

ʔikja saki (鳥賊をさく)

ʔunagi ʃo : ʃi (鰻をさいて料理する)

ʃo : ʃui は、「料理を作る」ことをいう。

かく

tʃadɕawannu kīriti (湯のみがかけた)

sabakīnu ha : nu kī : riti (櫛のはがかける)

sabakī は普通の櫛をいい、kufi はすき櫛をいう。

suinu ha : nu kī : riti (剃刃のはがかける)

kasu : Fufi kīdziri (鏝節をけずる)

おる

karijuda : wui (枯れ枝をおる)

hainu wuriiti (針がおれる)

わけ

jinne : ʃi wī : ri (等分にわけろ)

nintē : wī : ri (人数をわけろ)

きる

tamana : gudɕagudɕa kʔijui (きやべつを細かくきる)

do : kunĩ gudʒagudʒa kʔijui (大根を細かくきる)

tsĩi hanikʔjatta (釣糸がきれた)

ʔami kʔuikʔjatta (綱がくいしられた)

hasan fi ɕimo ʔutʃiki : (鋏で紐をきる)

ha : fi ʔito kaŋki : (歯で糸をかみきる)

tsĩmĩ kʔi : (爪をきる)

kamatsĩ marusa kʔi : (髪を短くきる)

tufitʃi ʔikigirĩ fun (水にもぐって息がきれる)

ti : kitʃan (手をきった)

kubi kʔi : (首をきる)

たつ

kʔin taʃi (着物をたつ)

ちぎる

hana mudʒikʔi : (花をちぎる)

ɕigisati minnu kʔirijun gane : ʃi

(寒くて耳がちぎれそうだ)

sudi kagai kʔi : (袖をちぎる)

tʃʔuba mudʒikʔi : (人をひねる)

mudʒikʔi : は花をちぎったり、羽織の紐などをひっぱってくることや、爪で人をひねることにいう。kagaikʔi : は、ひっぱってくることをあらわす。kagaiの終止形は

kagajui, kagajun で、袖・手・綱などをひくことをあらわす。「綱引き」は tsĩna kagajë : という。

きざむ

tabaku kʔi : (たばこをきざむ)

けずる

empitsĩ tugi (鉛筆をけずる)

kĩ : kĩdzĩjun (木をけずる)

kana tsĩki (飽でけずる) kĩdzĩjui という。

katsĩbuʃi xĩgi (鏝節を庖丁などでけずる) 鏝節けずりなどでけずることは kĩdzĩ jui という。

かる

kamatʃi kʔi : (髪をかる)

kusa kai (草をかる)

nʔi kai (稲をかる)

niwakĩ kʔidzami (庭木をかりこむ)

ʃibafu kai (芝生をかる)

そる

ɕigi sui (髻をそる)

むしる

kusa muʃi : (草をむしる)

kamatʃi muʃi : (髪をむしる) 「むしり合い」をすることは、muʃi : kʔi : jë : という。

tuihani muʃi : (鳥の羽をむしる)

つむ

tomatonu mĩ : tsĩg kʔi : (トマトの芽をつむ)

hana tsĩgkʔi : (花をつむ)

mamĩ muʃi : kʔi : (豆をもぎとる) 「むしりとる」という表現。

ひく

no : gi : ʃi suikʔi : (鋸でひいてきる)

「すりきる」という表現。

おろす

ʔju fo : ʃi (魚を三枚におろす)

do : kuni ʔurufi (大根をおろす)

ʔuguma sui (ごまをする) 「すり鉢」は
suruhafʃi という。

juda ʔë : ʃi (枝をおろす) 終止形は ʔë :
ʃui という。

はねる

kʔubi kʔi : (首をはねる)

ハネルに対応する語は用いない。

そぐ

kamatʃi sui (髪をそぐ)

gobo : xǝgi (ごぼうをそぐ) 「へぐ」
という表現。

とぐ

ho : tʃa : tugi (庖丁をとぐ)

kumi tugi (米をとぐ)

みがく

Furudo : gu tugi (古道具をみがく)

nabi tugi (鍋をみがく)

kutsu migaki (靴をみがく)

ha : migaki (歯をみがく) 昔は tugi
ともいった。

ぬく

ʃijagi nugi (白髪をぬく)

kʔugi nugi (釘をぬく)

wë : nu sukunu ʔutiʔa (桶の底がぬ
けた) 「おちた」という表現。

むく

nikannuko : muki (みかんの皮をむく)

終止形は mukjun という。

hansiŋko : muki (さつまいもの皮をむく)

mami ʔa : ʃi (豆のさをむく) muki
を用いず、ʔa : ʃun を用いる。これは、ア
カス(離す)に対応する語である。

sǝgiŋko : muki (杉の皮をむく)

ʔjunuko : hagi (魚の皮をむく) 終止形
は hagjui という。魚の皮はハグを用いる。

ʔikki ʔutufi (魚のうろこをおとす)

mugi : ʔa : ʃi (貝の殻をむく) 「離す」
という表現。

tīdan tīrattī ko : nu mukī tī (日に
やけて皮がむけた)

hagkë : tī tsʔi buʃi ʔutʃihadʒan (こ
ろんで膝をすりむいた)

はぐ

të : Fu ʃi ʔikkjanu Fukinīgattī

(台風で棟のおさがが吹きとられた)

終止形は Fukinīgajui という。

kasapko : hagi (かさぶたをはぐ)

tsīmī nīgafuddo : (爪をはがすよ)

終止形は nīgafui という。

ʔudupko : hagafi (ふとんの皮をはがす)

pegkinu hagi tī (ペンキがはげた)

Futun makuri (ふとんをはぎとる) 終止
形は makujui という。

まがる

jujuganī magi : (針金をまげる)

kʔuginu magatī (釘がまがった)

tsʔi buʃi : magī tī (膝をまげた) 終止
形は magī jui という。

ためる

dī: magī (竹をためる) 「まげる」という表現。

たわむ

judanu sīdarī (枝がたわむ) 果実がなりすぎて、枝がたわむ状態になることをいう。

しなう

dī: nu kadzīfi nabo: rī (竹が風でしなう) 終止形は nabo: rījui という。

ねじれる

juguganīnu sanīkutī (針金がねじれる) 終止形は sanīkujui という。

ひねる

k²ubi ju: ga: (首がまがっている様子)
kubi jugadan (首がゆがんだ)
tī: sanīkutī (手をひねった)
dzagutfi mudī (蛇口をひねる) 終止形は mudījui という。

つねる

hagi mudzik²i: (足をつねる) 終止形は mudzik²ijui という。

かたむく

tukkuinu jugamjun (徳利がかたむく)

へこむ

mī: nu k²urudī (目がへこんだ)
k²urumjun は、「黒ずむ」に相当する語で、へこんだときの状態をいっている。
gamakunu ʔutʃitsikati (腰がへこんでい

る) ʔutʃitsikajui は、空腹のために腹が背にくっついている状態になっていることをいう。

くぼむ

mitfinu k²ubumjui (道がくぼむ)

ほる

jigawa Fui (井戸をほる)

midgu: Fui (溝をほる)

hansi kadī (さつまいもをほる)

kadījui は、hatē: kadī (畑をたがやす)

ta: kadī (田をたがやす) のように、「たがやす」の意がある。

ta: ʔaki (田をつくる) ʔaki²jui は、「開墾する」の意。ʃinda ʔaki (新田を開墾すること)。

han Fui (印鑑をほる)

ʔudī nan ʔiredzumi ʔiriten (腕にれずみをほってある)

かれる

kī: nu karīti (木がかれた) 終止形は karījui という。

しおれる

hananu su: rīti (花がしおれた) 終止形は so: rījui という。

jasē: nu so: rīti (野菜がしおれた)

しばむ

hananu sībudi (花がしばんだ) 終止形は sībujui という。

つぼむ

hananu tsibudun (花がつぼんでいる)
kasa: k^ou:i (傘をつぼめる) 終止形
は k^ou:jui という。「閉める」意もある。

しなびる

hansinu kugarïjui (さつまいもがしなびる)
kugarafui (しなびさせる) という
他動詞もある。

やせる

du:nu jë:tï (体がやせた) 終止形は
jë:jui, jë:jun という。沖縄奥武で
は je:ja:džimu (やせている肝) という
表現がある。これは魚やさめなどの肝につ
いていう。「やせる」という意味では用いら
れない。

かじかむ

tï:nu ?utjikë:tï (手がかじかんだ)
?utjikë:juddo: (かじかむよ)

のばす

getta nubafumï (ゴムをのばすか)

ふくれる

muttŋi:nu Fukurïtï (餅がふくれた)
終止形は Fukurïjui という。
?amparë: Fukurafi (風船をふくらます)
?amparë: は、豚の胃袋をふくらまして作
ったもの。昔は太鼓なども作った。
watanu Fukurïtï (腹がふくれた)
子供などが叱られて「ふくれる」ことは、
bukkïjun という。

はれる

tsïranu Fukurïtï (顔がはれた)
tï:hagïnu Fukurïtï (手足がふくれた)
gabunu dğindğin Fukurïtï kjui (お
できが次第次第にふくれてくる)
mïbutsï: natï (目がはれる) 「目が
はれぼったくなる」という表現。
gabu は、おできのような「はれもの」一般
をさす。?audğirufi は「青くはれあがった
あざ」をいう。打撲によってできたもの。
「みみずばれ」は ?ausïdzï ともいう。

ふとる

kunuguru k^owë:sigïtsï (この頃はふと
りすぎている)
kï:nu Fudë:jun (木がふとる)
k^owë:jun は「こえる」, k^owë:sigï
jun は「こえすぎる」に対応する。

はる

tïndgo: hai (天井をはる)
wata ?ippai natï (腹がはった)
tïmmaku hai (テントをはる)
fajin hai (写真をはる)
ko:jaku hai (膏薬をはる)

むくむ

hagïnu Fukurïjui (足がむくむ)
tsïranu Fukurï (顔がむくむ)

ふやける

hagïnu çidğajui (足がふやける)
「豆」を水につけていてふやけることにもい
う。足を水につけたり乾かししたりしているう
ちに、足にひびがはいったようになるが、こ

れを ta : warī という。

こえる

mitfanu kē : tī (土がこえている)

むくれる

warabīnu bukkī tī (子供がむくれている)

終止形は bukkījun という。

うむ

gabunu ʔudī (おできがうんでいる)

終止形は ʔumjun という。

gakinu ʔudī (柿がうれる)「柿」は単独で

も、語頭が濁音で gaki という。

nʔīnu ʔudī (稲が熟する)

jagatī ʔumjumī (やがて熟するか)

はらむ

jumīnu haradī (嫁が妊娠している)

ʔjunu haramī : (魚がはらむ)「魚の卵」

は haramī という。

ʔufinu haradī (牛がはらんでいる)

人間も動物も区別なく、haramjui という。

つかれる

kju : ja darī tī (今日はつかれている)

(3) 着用の語彙

きる

kʔin kʔi : (着物をきる)

終止形は kʔijui という。反義語は hadzī :,

hadzījui という。

はく

ʔafigja kʔun (下駄をはく) kʔumjun

ともいう。反義語は nīgi, nīgijui という。

tabi nuki (足袋をはく) 反義語は hadzī :,

hadzījui という。

hakama kʔi : (袴をはく)

かける

mīganī kē : (眼鏡をかける) 反義語は

hadzī : という。

denwa kē : (電話をかける)

はめる

tībukuru nīki (手袋をはめる) 終止形

は nīkjui という。

ʔudīdukē : hami (腕時計をはめる)

ʔujubuganī tī : katʃi nīki (指輪を

指にはめる)

かぶる

buʃi kabui (帽子をかぶる)

kasa kabui (傘をさす)

mīn kabui (お面をかぶる)

çigjuru mīdzī kabui (つめたい水をか

ぶる)

suḡkabui ʃun (借金をかぶる)「損かぶり」

という表現。hoʃo : do : rī (保証倒れ)

という言葉もある。保証人になって他人の借

金をはらうような状態になることをいう。

しめる

kʔjubi : ʃi : (帯をしめる)「する」とい

う表現。

kʔjubi : kʔubi : (帯をむすぶ)

hatʃimaki kʔubi : (はちまきをしめる)

fitaobi fimĩ : (ふんどしをしめる)

終止形は fimĩjun という。

反義語は hadzi : という。

つける

botan tsĩkĩ (ボタンをつける)

kandzafi safi (髪かざりをつける)

kamatfi nan ʔabura : tsĩkĩ : (頭に
油をつける)

kʔidzi gutfi nan kysui tsĩkĩ (傷口
に薬をつける) 「切り傷」は kʔi : kʔidzi
という。

ʔofiroi tsĩkĩ (おしろいをつける)

kʔinna muta : tsĩkĩta (着物に土をつ
けた)

さす

haisafi nan hai safi (針さしに針をさす)

niginu ʔittfi (とげがささった)

nigi は、古語の「のぎ・芒」に対応する。

沖繩ではソージと言い、「とげ」一般をさす
と同時に、「魚の骨」などにもいう。

しく

nidziki fiki (ござをしく)

dzaFuton fiki (座ぶとんをしく)

ʔudu ʔijugʔjui (ふとんをしく) 「ひろ
げる」という表現。

sĩna hoi (砂をしく) ho : jun (まく)
で表現している。

くるむ

ʔa : kʔwa kitto : fi tsĩmmĩ (赤ちゃ
んを毛布でくるむ) tsĩmmjui (包む)
で表現している。

まとう

kjoragin kʔi : (晴着をまとう)

ʔasĩmatsĩbui fun (足手まといになるこ
とをする) matsĩbui は糸がもつれたり、
物事がこんがらかることにいう。

むすぶ

saban wu : tsĩkĩ (草履の紐をむすぶ)

kudzĩnu wu : kʔubi : (靴の紐をむすぶ)

haoĩnu ʔimo kʔubi : (羽織の紐をむすぶ)

kʔjubi : fun (おたいこ帯をむすぶ)

tĩ : tsĩnagi (手をむすぶ)

終止形は tsĩnagjui という。

jen musĩbĩ (縁をむすぶ)

tĩ : hagi kʔubi : (手足をしぼる)

つなぐ

nuiso : tsʔĩnagi (糸をつなぐ) 終止形
tsʔĩnagjui という。

Funĩ tsʔĩnagi (舟をつなぐ)

tĩ : tsʔĩnagi (手をつなぐ)

ʔin tsʔĩnagi (犬をつなぐ)

tsʔĩgeki fun (つぎ木をする)

すげる

ʔafigjanu hanawu : tsĩki (下駄の鼻
緒をすげる)

kamanu ji : siɡĩ (鎌の柄をすげる)

終止形は siɡĩjun という。

つかむ

ʔiki ʔjuba mĩggi : (生きた魚をつかむ)

終止形は mĩggjun という。

ʔamma : tĩ : tsĩnagi (母の手をつなぐ)

「つかむ」の意では、mĩggi ということが

できる。

つかまえる

nusudu miŋgi (だろぼうをつかまえる)

mja : nu nĩdzĩn tui (猫がねずみをとる)

ゆう

kamatʃi jui (髪をゆう)

ゆわえる

nĩ : kʷubi : (荷をゆわえる)

たばねる

gaja nigi : (茅をたばねる) 「茅」は、単
独で用いられるときにも、語頭は濁音で
gaja という。nigi : の終止形は nigijui
という。

kusa nigi : (草をたばねる)

kĩ : maruki (薪をたばねる) 終止形は
marukjui という。

kamatʃinu mutu kubi : (髪のもとをた
ばねる) 「元結」のことは mutuju : とい
う。

つつむ

kʷaʃi tsĩmmi (菓子をつつむ)

Furufikifi tsĩmmi (ふろしきでつつむ)

kʷin takubi (着物をたたむ)

kasa : kʷu : i (傘をたたむ)

takubi の終止形は takubjui という。

かたづける

waku : katatsĩkĩ (仕事をかたづける)

ja : katatsĩkĩ (部屋をかたづける)

しまう

do : gu kakko : i (道具をしまう) 終

止形は kakko : jui という。

(4) 火熱の語彙

もえる

mʷatsĩnu mē : jun (火がもえる)

kun kĩ : ja jittʃa mē : jun (この木
はよくもえる)

naniku mē : ʃi (ごみをもやす)

ʃiba mē : ʃi (落葉をもやす)

kundo : nu kʷwadʒifi nakan ja mē :

tʃi (今度の火事でおもやをもやしてしま
った)

たく

hammē : taki (ごはんをたく)

Furo : taki (風呂をたく)

katĩmun taki (おかずをたく)

つける

ʧutʃi ʔifi ʃi ʧi : tsĩkĩ (火うち石
で火をつける)

ro : soku tubuʃi (ローソクをつける)

おこす

mʷatsĩ ʔukuʃi (火をおこす)

ʧidʒi : (もえさし), sumi (すみ),

tandĩn (すみ火・炭すみという表現),

hai (灰), ʔaku (灰汁), dʒiju

(地炉), dʒijubē : (地炉灰)

あぶる

ʔikja ʔabui (するめをあぶる)

tī: ʔabui (手をあぶる)

やく

jī: no: jaki (山をやく) jī: no: は

山・原のことをいう。

ja: jatʃan (家をやいた)

sīn jaki (炭をやく)

jatʃu: jaki (炙をすえる)

ʔju jaki (魚をやく)

mutʃi: jaki (餅をやく)

niku jaki (肉をやく)

tamago jaki (卵をやく)

hansī: jaki (芋をやく) 「里芋」のこと
とはʔun という。

ʔuban nigī: (おにぎりをこしらえる)

こげる

nabitʃiki: nu tsītsī (おこげがついた)

「おこげ」のことは nabitʃiki: という。

これは「鍋つき」という表現である。

çi: kijatʃi jakītsīkītan (干あがって
こがした) çi: kijaʃui とは「干あがら
てしまう」ことにいう。jakītsīkīʃui は、
鍋が「焼きついた」ことをあらわす。

tatamī jatʃi (畳をこがした)

くべる

kī: dondon mē: sī (薪をどんどんく
べる) 「もやせ」という表現。

あげる

ʔagīmun ʃi: (てんぷらをあげる)

「あげる」は ʔagīʃui という。

いためる

tamananu ʔabura ʔi: ki: (きゃべつの
油いため)「野菜いため」なども、「豆」と
同じく、ʔi: kʃui (いる)という。

いる

mami ʔi: kʃui (豆をいる) ʔi: tʃi ʔuko:
(いっておこう) ʔi: kjo: (いろう)

わかす

ju: wa: ʃi (湯をわかす)

tʃa: wa: ʃi (茶をわかす)

Furo: taki (風呂をわかす)「風呂」は
「たく」と表現する。

misuʃiru wa: ʃi (みそ汁をつくる)

ゆでる

tamago judīʃui (卵をゆでる)

ʔibitagga: ni: (海老をゆでる)

ゆがく

ʔika mīdzīdaki ʃi: (鳥賊をゆがく)

do: kuninumīdzīni: (大根の水だき)

ʔunu maʃuni: ʃi: (里芋を塩を加えてに
る)

せんじる

ʃindʒi gusui (せんじ薬) 終止形は
ʃindʒiʃui という。

たぎる

ju: nu takitʃan (湯がたぎっている)

takitʃuddo: (たぎっているよ)

にる

ʔju ni : tʃi (魚をにる)

mamĩ ni : (豆をにる) 終止形は njui という。

firunu ʃi : kiritan (みそ汁がにつまった)

むす

ʔamamĩ : gafiki muʃi (赤飯をむす)

kafiki とは「おこわ」のことで、「ふかしごはん」ということ。ʔamamĩ : ʔuban taki (あずきのごはんをたく)

ふかす

mandʒu : kafiki (まんじゅうをふかす)
終止形は kafikjui という。

むれる

ʔuban ʔunʃi (ごはんをむらす) 終止形は ʔunʃui という。

kju : ja ʔutuʃʃa Fumĩkʃui (今日はひじょうに暑い)

haginu muʃun (足がなれる)

いぶす

ʔabuidʒaʃi (いぶり出す)
終止形は ʔabuidʒaʃui という。

くすぶる

kĩbusĩnu Futsĩmui (煙がくすぶっている)

けむる

kĩ : nu Futsĩmutĩ (薪がけむっている)

あたる

mʔatsĩ nukun (火にあたる)

あたためる

binto : nukumĩ (べんとうをあたためよ)

(5) 飲食の語彙

たべる

munu : kamĩ (ごはんをたべろ) 「食べる」の普通態は kamjui, 尊敬態は miʃo : jui という。

くう

hammẽ : kami (飯をくう) 終止形は kamjui という。

gadzanun kʔu : watta (蚊にくわれた)

sẽ : gurẽ : (酒のみ) 普通の表現は,
sẽ : nun (酒をのむ)

ʔuʃinu munu kadui (牛が餌をくっている)

のむ

mĩdzĩ numjui (水をのむ)

kusui numjui (薬をのむ)

sẽ : numjui (酒をのむ)

suikwanu tanĩ ba nuʃkun (西瓜の種をのみこむ)

tabaku Fukjun (たばこをのむ)

ʔjunu jiduba nuʃkumjui (魚が餌をのみこむ)

かむ

ʔuʃinu nĩgan ʃun (牛が草を胃から出してかむ) nĩgan は「寝がみ」であろう。

ʃindʒa : nu mun kan (山羊が餌を食っている)

hammẽ : ji : Fun kamĩ (ご飯をよくかめ)

ʔinuni kʔu:watta (犬にかまれた)

habun kʔu:watta (ハブにかまれた)

「ハブ」の場合は、とくに ʔatirattan (あてられた) と表現する。

終止形は ʔatirarēi という。

かじる

hansī kʔuiwai (さつまいもをかじる)

kʔuiwajun は、「食い割る」という表現。

riŋgo kʔuiwai (リンゴをかじる)

nīdzinnu hansī: kamjui (ねずみがさつまいもをかじる)

ʔujanu sīnī kadgi: (親のすねをかじる)

つつく

tuinu mumba tsīkjagījui (鳥が餌をつつく)

ʔujaduinu kʔwakkwa:ba tsʔikihagafi (親鳥がひな鳥をつつきはなす)

なめる

ʔamīdama ſibui (飴玉をなめる)

終止形は ſibujui という。

ʔujamja:nu kʔwamja:ba namījui

(親猫が仔猫をなめまわす)

sata:ba namījui (砂糖をなめる)

すう

tʃʔi: nun (乳をすう) 「飲む」という表現。

ʔiki ſi: (息をすう) 「為る」という表現。

すする

kai kan (粥をすする) 「食う」という表

現。

ふくむ

mīdzī Fukun (水をふくむ)

ʔamīdama Fukun (飴玉をふくむ)

(6) 主な動詞

ʔa: naki (あおむく)

çu: tʃi ʔi: (あぐらをかく)

ʔa: gajun (明るくなる)

ʔa: gatun (明るくなっている)

ʔasubi: (遊ぶ) ʔasubjun ともいう。

nukun (あたたまる)

mʔatsī nukun (火にあたってあたたまる)

kamē: jui (頭にものをのせる)

奄美では沖繩のように、頭にものをのせて運ぶ方法は、あまり発達しなかった。それは、山が多く険しい山道が多かったからだと考えられる。そのかわりに、tēru (ざる) に tēnno: (ざるの緒) をつけて、頭にかけてものを運ぶ風習が発達していた。

ʔatsimīrī (集める)

Fumīkjui (暑い天気になる) Fumītʃi ともいう。

Fumīkjuro (暑いだろう)

Fugafi (穴をあける)

mī: Fugafi (穴をあける)

ʔami (編む)

jamī: (あやす) 浦上では sīkasi という。

ʔarē: (洗う)

ʔaiki: (歩く) ʔaikjui とも、ʔaikjun ともいう。

ʔukɪŋkara juwaggaɖi ʔaiki (宇検から
 湯湾まで歩く)
 ʔjui (言う) ʔjun ともいう。
 ʔikidʒun (生きている)
 nama ʔikidʒun (今生きている)
 nʔjutʃi hamajun (一生懸命になる)
 nʔjutʃi hamatun (一生懸命になっている)
 wui (居る)
 tʃʔunu wui (人が居る)
 ʔiri (入れる)
 munu ʔiri (物を入れる)
 munu : ʔirigo : nan ʔiriri (物を
 入物に入れよ)
 ja : katʃi ʔiriri (家に入れる)
 katsiri (飢える) 古語の「かつえる」に
 応じている。
 katsiridʒin (餓死)
 katsirigan (飢え食い) ムシャムシ
 ャ食うことの形容ともなる。
 katsiri という語は、「がつがつする」の
 「がつがつ」や、沖繩の katʃiri : n (芋な
 どがしなびて、しわしわになる) gadʒiri : n
 (極度にやせほそる) などの語根とも関係が
 あろう。
 ʔui (植える)
 ta : ʔui (田植え)
 ʔukjagati (浮かぶ)
 Funinu ʔukjagati (舟が浮かぶ)
 ʔutafi (歌う)
 ʔutafa : (歌する人)
 ʔutsiki : (うつむく)
 mʔarijun (生まれる)
 mʔarita (生まれた)
 nafun (産む)

kʔwanafi ju : wë : (出産祝い)
 harami (妊娠すること) 人間や動物一般
 についていう。
 harama : (妊婦) 人間や動物一般につい
 ていう。
 kʔwa nafa : (生まず女) 「子無し者」
 という表現である。
 buriggwa (多産の子供達) 「群れ子」
 という表現をとっている。
 ʔidʒafi ju : wë : (お七夜) 初外出の
 お祝い。
 siɖi jun (孵化する)
 tsikanajun (飼う)
 ʃinjun (死ぬ)
 kuffun (殺す)
 ʔumjun (熟む・熟する) ʔudan (熟んだ)
 gakinu ʔumjun (柿が熟む)
 nʔinu ʔumjun (稲が熟する)
 ʔusë : (埋める)
 munu ʔusë : (物を埋める)
 ʔusajumi (埋めるか)
 ʔui (売る)
 ʔui kai ʃi (売り買いする)
 ʔirabi : (選ぶ)
 ʔuja : fun (追い払う)
 人でも、牛でも、鳥でも「追い払う」こと一
 般についていう。
 ʔuitsikijun (追いかける)
 ʔogami (拝む・祈る)
 xi : (起きる) xi : jun ともいう。
 ʔutfuki (置く) ʔutfukjui ともいう。
 munu ʔutfuki (物を置く)
 tsʔinadzuki (つないで置く)
 ʔugujun (奢る)
 jusi jun (教える)

- dzĩ : jusĩro : (字を教えよう)
- hon jusĩro : (本を教えよう)
- figutu jusĩro : (仕事を教えよう)
- 家などをきかれて、「教える」ことにもいう。
- jugkjabujun (おしゃべりする・方々に言い
ふらす)
- jugkjabunna (おしゃべりするな)
- jugkjabuja : (おしゃべりする人)
- jugkjabuja : to : sĩraran (おしゃべ
りする人とは相手にできない)
- mapki (踊る)
- wudui ともいう。
- wuduiƿa : (踊る人)
- ʔutufi (落とす)
- xĩguru ʔutufi (垢をおとす)
- nĩkan ʔutufi (みかんをおとす)
- çiko : kinu ʔutĩtĩ (飛行機がおちる)
- kaggĩ : (おぶう) kaggĩrĩ ともいう。
- kaggĩro : (おぶろう) kaggĩrĩ (おぶれ)
- kʔwaba kaggĩ : (子をおぶう)
- 浦上では「おぶう」を ʃikari, または ʃikar
jun という。また、前に紐をして「抱く」こ
とを mē : ʃikari という。紐をしないで「お
ぶう」ことは kufidaki または kufidakafi
という。これは「後抱き」という表現である。
ちなみに、前に抱くことは mē : daki という。
「抱く」に前後の差が明確に区別されている
ことは、浦上方言の特徴である。
- ʔubukurĩjun (溺れる) ʔubukurĩjui と
もいう。
- ʔubukurĩjuddo : (おぼれるよ)
- mʔarijun (生まれる)
- ʔuigi : (泳ぐ)
- ʔui (織る)
- nunu ʔui (布を織る)
- ʔurufi (おろす)
- nĩ ʔurufi (荷をおろす)
- ʔurĩ (おりる)
- nikaikara ʔurĩ (二階からおりる)
- kauĩ : (買う)
- kauran (買わない)
- kauta (買った)
- kaunna (買うな)
- kauja : (買う人)
- kauimun (買物)
- kaujun munna ne : nta (買うものがな
かった)
- kaubba jitƿa : tta (買えばよかった)
- kauri (買え)
- tsĩkanajun (飼う)
- wadzĩrajun (わずらう・めんどろをみる)
- tʃʔu : wadzĩrajun (病人のめんどろを見る)
- ʔutsĩki (かがめる) 田植をするときのよ
うに腰をかがめる。
- kaki (搔く)
- jugo : sa : tĩ kakĩ (かゆいから搔け)
- kakimufi : (搔きむしる)
- kē : jui (掛ける)
- kasabĩ : (重ねる)
- ʔutʃike : i (かじかむ) ʔutʃike : jui
ともいう。
- tĩ : nu ʔutʃike : tĩ (手がかじかむ)
- sannjo : ʃi : (かぞえる・勘定する)
- katatsĩkĩrĩ (片づける)
- katamĩ : (かつぐ) katamĩjui ともいう。
- nju : katamĩ : (荷をかつぐ)
- mərutambo : katamĩ (丸太をかつぐ)
- ʔo : ku : ʃi katamĩ (天秤棒でかつぐ)
- tʔai ʔo : ku : ʃi katamĩ (荷を中に

して棒を入れて二人でかつぐ)
 ʔumjun (化膿する) ʔudan (化膿した)
 kabui (被る)
 kasa kabui (笠を被る)
 buʔi kabui (帽子を被る)
 kamaijun (かまえる)
 nja:nu kamaitun (猫がねらいをさだめ
 てかまえている)
 kamatsi siiki (髪を梳く)
 「髪油」は kamatsi ʔabura とも, tsiki
 ʔabura ともいう。
 Fugkamjui (噛む)
 ju: Fugkami (良く噛め)
 niigan (噛む) 牛などが長時間、草を噛む。
 ʔitsimadiin niigan sunna (いつまで
 も食っているな)
 kamjun (かみつく)
 habu (ハブ), ʔin (犬), ʔwa:(豚)
 などがかみつく。
 kai:(借りる)
 kariiti (枯れる)
 ki:nu kariiti (木が枯れる)
 kawatʃi (乾く) kawakjui ともいう。
 nudunu kawatʃi (喉がかわく)
 kʔo:hajui (乾く) ko:hatta (乾いた)
 Fufimunnu kʔo:hai (乾物がかわく)
 kʔo:habbaja jittʃa (かわけばよい)
 物がかわくことには, kʔo:hajui を用い、
 喉がかわくことには, kawakjui を用いる。
 kikjui (聞く) kitʃui (聞いている)
 葉が効くことも kikjui という。kitʃi:ko:
 (聞いて来い)
 kʔi:(着る)
 kʔinu: kʔi:(着物を着る)
 kʔi:kè:(着替えること)

kusiʔjui (着せる)
 ʔudu kusi:(布団をかける)
 kʔin kusi:(着物を着せる)
 kusi:の ku- は、沖縄でも kufi:n
 (着せる)のようになって、キに対応してい
 ない。
 ʃabi:(着かざる)
 kigtsiki (気をつける)
 kami (食う) kamjun ともいう。
 hammè: kami (ものを食う)
 kanno:ʃi (食い残す)
 kusariti (腐る) kusari: ともいう。
 魚や肉が腐ることにいい、ごはんや芋などは
 si:jun (饑える)という。
 nè:ʃui (くじく)
 nè:ʃuddo:(足をくじくよ)
 nè:ʃui (足をくじいている)
 hagiba nè:ʃan (足をくじいた)
 gudʒukui (くすぐる)
 xiʔkkudun (くぼんでいる)
 kʔun (汲む) kʔumi: ともいう。
 miʔdzi kʔun ʔagi (水を汲みあげる)
 kʔudui (汲んでいる) 音韻的には kudui
 (込んでいる)と対立している。
 kʔuramjun (眩む)
 mi:nu kʔuradi (目がくらむ)
 kugi (漕ぐ)
 Funi kugi (舟漕ぎ)
 ʃʔidʒimajun (こごえる)
 haʔkè:(ころぶ) haʔkè:jun, haʔkubbi
 ともいう。
 kurubi (ころぶ)
 dukurubi (自分でころぶ)
 ko:majun (困る)
 wanna ko:mati (私は困った)

kuffi : (殺す) kuffun ともいう。

sunibui (ごろ寝する)

su : は「皆」をあらわす接頭辞である。

k^owa nafi (子を生む)

kjo : fi (こわす)

ja : kjo : fi (家をこわす)

sakjun (咲く)

sagi^ojui (さげる・掛ける)

sag^oituk^oi (さげておけ)

kaggi : (支える) ざるに縄をつけて頭にささえる。

kamatsini kaggi : (頭にざるをささえる)

沖縄では「支える」一般に kage : in という。

abu^ojui (叫ぶ) 遠くに居る人を大声で呼ぶ意にも用いられる。

sabit^oi (錆びる)

samit^oi (醒める)

mi : nu samit^oi (目が醒める)

sudar^oin (しおれる)

ki : nu sudar^oin (木がしおれる)

po : fi (叱る)

浦上では、?ito : fi または ?itaguri という。

mifikjan (叱る)

目を大きくして怒りを示して叱ることで、言葉を出さない。このようなときの目のことを

?ajam^oi : という。

dzikannu ka : jui (時間がかかる)

sigejun (茂る)

fikki : (沈む) fikkjui ともいう。

fikkjafi : (沈める) fikkjafui ともいう。

sinabiriti (しなびる)

sim^ojui (締める)

sijagi (精げる)

finjun (死ぬ) fidzan (死んだ)

mo : fun (死ぬ・なくなる) 人間だけに用いる尊敬語。

kakko : i (しまう・保管する)

kadzimiri (しまつせよ)

k^ou : jui (閉める)

kam^oinu futa k^ou : i : (甕の蓋をしめる)

?ut^ofiki : (しゃがむ)

fa^ofutuki (しゃぶっている)

fibutuki とも、fibui ともいう。

fittfui (知っている) fijan (知らない)

si : jun (饅える) si : tan (饅えた)

ごはん類が腐ることに用いる。「腐ってすばくなる」ということが原義で、「酢」を動詞化したものがこの語の起こりである。魚や肉などが腐るときには、kusari : という。

sit^oiri (捨てる)

suiki : (すり切れる)

?i : (坐る) ?jui ともいう。?ittfi (坐れ) ?juba (坐れ)

?ittfui (坐っている)

suwati mo : ri (坐ってください)

suwarinfo : ri (坐ってください)

ci : fi : (性交する)

鳥・牛・馬・山羊など動物一般の場合には tsibbjui という。

?ut^ofikja : ri (背をもたせる) nagkja : ri ともいう。

sui (剃る) sujun ともいう。

suruti (揃う)

to : fi (倒す)

ki : to : fi (木を倒す)

kade : (耕す)

浦上では hadë: ʔatsikë: (畑を耕す) という。

tamijun (貯える)

tatfun (立つ) tatī (立て)

tatfui (立っている) tatfumī (立っているか)

tatī (建てる)

kamjui (食べる) kamjun ともいう。

hammë: kamjui (ものを食う)

tamajun (たまる)

kanīnu tamajun (金がたまる)

sandgarī (だらしがない)

sandgarī ko: (だらしのない人)

ko: は「人」の義である。

taran (足りない)

ʔidgafui (出す)

fiba ʔidgafi: (舌を出す)

ʔidgi: (出る)

ja: ʔidgi: (家を出る)

hagafi: (乳離れ)

豚・山羊・牛・親子などを親と子に分けて乳離れさせること。

hagari ʔwa: (乳離れした豚)

mindzun (つかまえる) mindzan (つかまえた)

どろぼうや鳥・虫・魚などをつかまえる。

nusudu: o mindzan (どろぼうをつかまえた)

手をにぎることも、ごはんをにぎることもいう。

tī: mindgi ʔaikjun (手をにぎって歩く)

darījun (疲れる) darītī (疲れて)

tsukure: (つくろう)

tsīmmi: (包む) tsīmmjun ともいう。

ふろしきや紙などに「包んで行け」は tsītu:

fi ʔiki, または tsīndi ʔiki という。

kuimatfibui (つまづく)

tʃʔakutʃi: fun (つまみぐいする)

tsīmikun (詰めこむ)

tsʔiʔki: (摘む)

tsīn (積む)

Funī katsī tsīn (舟に積む)

tsʔiŋgi (つむぐ)

tsʔiratta (釣れた)

daiban ʔijunu tsīratta (大魚が釣れた)

tsī: (釣る)

ʔjutsī: (魚釣り)

tsībbu: (釣り竿)

sītʃui (手足をのばす) sītʃun ともいう。

hagi sītʃi (足をのばせ)

ʔujubī magitai sītʃai (指を曲げたりのばしたりする)

ゴムや髪などの「のばす」ことには nubafun という。

tījun (照る)

k²umujun (曇る)

harījun (晴れる) harītun (晴れている。)

Fujun (降る)

sīrarui (できる)

wannīn sīrarui (私にもできる)

tugai (尖る)

tugi: (研ぐ)

tugifi (研石)

tudukjun (届く)

tī: nu tudukjun (手が届く)

tukijun (溶ける)

tubjagai (飛びあがる)

wudui (とびこむ) wuduikun ともいう。

tubjun (飛ぶ)
 tuinu tudun (鳥が飛んでいる)
 ʔusaginu tudun (兎がはねている)
 tumai (止まる)
 tuinu kī:n ʔui nan tumajun (鳥、
 が木の上にとまる)
 basīga teirju:fonu mē:nan tuma
 tun (バスが停留所の前にとまっている)
 tumai (泊まる)
 tʃʔunu ja:nan tumajun (人の家
 にとまる)
 nau (縋う)
 no:ʃi (治す)
 naga ʔiki ʃun (永生きする)
 nagariiti (流れる)
 Funīnu nagariiti (舟が流れている)
 nakjui (泣く) natʃui (泣いている)
 nakjui (鳴く) natʃun (鳴いている)
 鳥の鳴き声一般についていう。鶯などはとく
 に Fukjun という。
 buijun (吠える)
 ʔinuga buijun (犬が吠える)
 wo:kuja: ʃun (じゃれる)
 nē:n natan (なくなった)
 nagī (投げる)
 ʔifi nagī (石をなげる)
 fibui (なめる) 「しゃぶる」に対応する。
 浦上では nabui という。これは「なめる」に
 対応する。
 namati (なまる)
 ho:tʃa:nu namati (庖丁がなまる)
 narē: (習う) narējun ともうい。
 narījun (慣れる)
 nai (成る)

nai wu:rīti (実が成って枝が折れそ
 うにしよう)
 nainu nai (果実が成る)
 nai sagai (すずなりになる) 「なりさ
 がる」という表現。
 ʔo:jun (似合う) ʔo:tui (似合っ
 ている)
 mabujui (にらむ) 終止形は mabujun と
 もいう。
 tʃʔuba mabunna (人をにらむな)
 kʔinnui (縫う)
 nīgju (抜く)
 ha:nīgī (歯をぬく)
 hadzī: (脱ぐ) hadzījun ともうい。
 kʔinu: hadzī (着物を脱ぐ) kʔin
 hadzī: ともうい。
 hattī kī: (脱いでおけ)
 nurījun (濡れる)
 murufukun nurīti (びしょぬれになる)
 nui (塗る)
 nībui (寝る)
 hagkubi: (寝ころぶ)
 nīkudun (寝こんでいる) nīkudubba
 (寝こんでいるから)
 no:i (残る)
 nīdzimī ʃun (覗く) 「のぞき目する」
 という表現。
 nubjun (のびる) nudan (のびた)
 gumunu nubjun (ゴムがのびる)
 numjui (飲む) nun, numjun ともうい。
 sē: numjun (酒を飲む)
 mīdzī nun (水を飲む)
 nui (乗る)
 Funī nan nui (舟にのる)
 nusījui (乗せる)

hē: jui (入る)
 kasa nan madzīn hē: rī (傘にいっ
 しょに入れ)
 mui (生える)
 kusanu mui tī (草が生える)
 ko: dginu muitī (麴が生える)
 ku: ru mui (自生すること)
 hauī: (這う) haujun ともいう。hauta
 (這った)
 蛇が這っているときにも、子供などが這って
 いるときにも用いる。
 datfinu ʔakjun (はかどる)
 ha: i: (計る)
 ho: ki: (掃く)
 haki (吐く)
 munu haki (ものを吐く)
 「あげる」ことは、ʔage: fiti ともいう。
 takkjabui (吐く)
 「よだれをたらす」ことにも judarī
 takkjabui という。
 kʔumjun (履く) kʔun, kʔumi(:) とも
 いう。
 tabi kʔumi (足袋をはく)
 ʔafigja kʔumi (足駄をはく) kʔun と
 もいう。
 saba kʔun (草履をはく)
 kʔudzī kʔun (靴をはく)
 hagī (禿げる) kamatfinu hagī (頭が
 はげる)
 hasamarī (はさまる)
 hadgimī (始める)
 ha: tari (はだける)
 ha: taribo: (前をはだけている人)
 hataraki (働く)
 hanafui (話す) hanafun ともいう。

hanītī (跳ねる)
 hamī: (はねる)
 hajai (はやる)
 sī tarījui (すたれる) sītarītan
 (すたれた)
 hanarī (離れる)
 ʧikjajun (光る)
 ʧi: n (ひる)
 hana ʧi: n (鼻をひる)
 hana ʧitʃi (鼻をひって) 「くしゃみ」
 をする意味になる。
 ʧu: gī (広げる) ʧu: gījui ともいう。
 Fuki (拭く)
 sagjun (ふさぐ)
 kutʃi sagi (口をふさぐ)
 mī: sagi: (目をつむる)
 kwē: tī (ふとる)
 dugē: jui (ゆれる) dugē: ともいう。
 自らゆれることにいう。
 ʧinajui (減る)
 maruku nai (短くなる)
 ʔempitsī maruku nai (鉛筆が短くな
 る)
 Fujun (堀る)
 makanajun (まかなう)
 kʔwaŋkja kamasamba naran (子供達
 を食わせねばならない)
 sīdatījun (育てる)
 magatī (曲がる)
 mitʃi magatī (道が曲がる)
 magajo mitʃi (曲がっている道)
 sīgi: (ませる)
 sīgitfun (ませている)
 madzīrī (まぜる)
 kumītu mamītu madzīrī (米と豆と

をまぜる)

mani ʔo:ʃi (間に合わす)

tsɿkabui (乱れる)

kamatsɿnu tsɿkabui (髪が乱れる)

mjuɪ (見る) mjunともいう。

ʃibai mjun (芝居をみる)

nikkuratɿ (見やがって) 卑語。

Fukafun (蒸す)

kʔubi: (結ぶ)

Fukki: (解ける)

kabutujun (群がる) 人・鳥・魚・蠅などが
群がる。

kabututʃi kjun (群がってくる)

mɿ:samɿtɿ (目覚める)

ʔwɛ:sɿrɿ (めしあげよ)

tubi: (もぐる)

mutʃagɿ: (持ちあげる)

jasumi (休む)

jɛ:tɿ (やせる)

jatsɿritɿ (やつれる)

ha:gɿsa (病気でやつれた様子)

jui (結う)

kamatʃi jui (頭髪をゆう)

juga: najui (ゆがむ)

ja:nu juga: natɿ (家がゆがむ)

Fumɿkafi (酔う) 体があたたまることから
「酔う」の意をあらわすようになった。

Fumɿkafa: は「酔っぱらい」のこと。

古語の「ほてる・熱する・赤くなる」の意味
をあらわす「ほめく(火めく)」に対応する
語であろう。沖縄では「気温が高くなってむ
す」ことや、「病気で熱を帯びること」にフ
ミチュンという。浦上では jukkurai (酔う)
といい、Fomeʃi は「あたたまる」ことに

いう。

judumjun (よどむ・休む)

mɿdzɿnu judumjun (水がよどむ)

ʃigutu judumjun (仕事を休む)

wa:jui (わかる)

jittʃa wa:ta (よくわかった)

wasɿrɿjun (忘れる)

watatɿ (渡る)

ʔun watatɿ (海を渡る)

語彙その3. 形容詞語彙

nagasa (長い)

marusa (短い)

八重山のマルサンに通じるもの。沖縄では

ʔintʃasan を用いる。

Fukasa (深い) Fukasan とも。

ʔasasa (浅い) ʔasasan とも。

ta:sa (高い)

çikusa (低い)

tu:sa (遠い)

tʃikjasa (近い)

çijusa (広い)

ʔibɛ:sa (狭い) 浦上では ʔibafa という。

Fɿ:sa (大きい・太い) Fu:sa, xɿ:sa
ともいう。Fu:kɿ (大木)

ʔinjasɑ (小さい・細い)

tʃʔintʃamɿggwa (極小のもの)

ʔinɟagɿ (細い木) ʔinɟamɿ: (細い目)

ʔuro:ʃa (細い)

ʔuro:ʃan ʔito (細い糸) ʔuro:ʃan
kɿ: (細い木)

ʔarasan (祖い)

mī : nu ʔarasan (網の目が荒い)
 ʧijasan (平たい)
 ʔubusa (重い)
 garusa (軽い)
 kʔurusa (黒い)
 fijusa (白い)
 ʔa : sa (赤い)
 kʔi : sa (黄色い)
 ʔausa (青い・緑だ)
 kʔurasan (暗い)
 kasasa (濃い) 苗を濃く植えすぎている様子。
 jude : sa (晚い)
 hajasa (早い)
 ʔasa hajasa (朝が早い)
 Fu : sa (多い)
 tʃʔunu Fu : sa (人が多い)
 ju : nu Fu : sa (湯が多い)
 kanīnu Fu : ku najun (金が多くなる・たまる) 「お菓子」などの「多い」は、
 gassagadi という。
 dʒanasa (多い) 困るほど多い場合にいう。
 ʔjunu dʒanasa (魚が多い)
 nikannu dʒanasa natī (みかんがたくさん成っている)
 ʔikkjasa (少い)
 tʃʔusa : n (強い)
 karadanu tʃʔusa : n (体が強い)
 古くは、「体が強い」ことには dukusa : n
 であり、dukusa : n tʃʔu (体の強い人)
 のように用いていた。
 wa : sa : (若い)
 kjurasa (美しい)
 kjuragin (美しい着物・外出用の晴着)

kjuramun (美人)
 kjura mē : rabi (美しい娘)
 ha : gīsa (みにくい) 男女を問わずに用いられる。
 ʔamasa (甘い)
 karasa (辛い)
 sīFē : sa (塩辛い)
 sī : sa (酸い)
 nigjasa (苦い)
 sībusa (渋い) 「しみる様態」にも用いる。
 mī : nu sībusa (目がしみる) 目が疲れて少し痛くなっているような状態にいう。
 mʔasa (うまい)
 nittfa (まずい)
 fibusa (かたい) 肉などがかたくて、歯でかみ切れないような状態にいう。石などのかたさとは別のもの。
 juwasa (ひもじい) jowasa, jo : fa
 ともいう。
 juwasa ja : (ひもじいね)
 juwaku natī (ひもじくなって)
 jo : fa dufi (飢饉の年)
 katsīrīdʒin (飢え死に)
 kabafa (かぐわしい)
 hananu kabafa (花がかぐわしい)
 kusasa (臭い)
 mīfikjarusa (まぶしい)
 mīfikjarusanu ともいう。mī : は「目」のこと。fikjarusa の語幹は「光」と関係があろう。
 ʔitfasa (痛い)
 kamatfinu ʔitfasa (頭がいたい)
 minnu ʔitfasa : (耳がいたい)

「痛さ」をあらわす形容詞は、『おもろさうし』では次のように用いられている。

「ゑけり、やうらきや、ことゝ、あんす、いちやけ、おもい」(14-19)

「うらよみちへ、きもちや、うらこやい」(13207)

「てやん、おなぢやらの、きもちや、おなぢやらの」(10-25)

「あわの、おやの、もすめ、きもちや、おやの、もすめ」(14-6)

「もりあり、たゝみきよ、きも、ちやさ、おしなせ、なさいきよ」(9-29)

『混効験集』には

「おきもちやべ(お肝ちやべ)」「きもちやさ(肝痛さ)」「しまちやへ(島痛み)」などの例がある。

戯曲には次の例がある。

「思切れよわらべ、きもいちやさあても、定またる事の、にやよしまれめ」(孝行の巻)
「あゝ、恐しやも知らぬ、みおんにゆけやべすが、責めさしゆる事の、御肝ちやさあらば…」(大川敵討)

現代語では

tʃimu ʔitʃasan (心が痛む・かわいそうに思う)

のように用いる。

現代沖縄の ʔitʃasan は「痛々しい・苦しい」の意味もあるが、「惜しい」「愛惜の情がはなはだしい状態」をあらわすようになった。
ʔitʃasa sun (痛さを為る)は「物惜しみする」意味になっている。

以上のように、沖縄の「いちや(痛)」の用法についての特徴は、内面的・精神的苦痛だけをあらわし、傷などの生理的痛みについては用いられないということである。

このように、「きもちやさ」は内面的苦痛をあらわすのが本義であるが、美称として「心が苦しくなるほどいい」という意味に転用されている。

これは、チムグリサン(肝苦しい)が内面的な苦痛を表わしていたのだが、この苦痛をもたらし対象の属性としての表現へと転用されていくことと同類の変化である。

同様の変化は、現代標準語の「見苦しい」「気の毒だ」「みっともない」「見たくもない」の変化)にもみられるものである。

湯湾では、生理的な痛さの表現に用いられているところに特色がある。

ʔatsisan (暑い) 蒸すように暑い状態をあらわす。動詞は Fumikjun という。

「熱い」も ʔatsisan という。

nukusan (暖かい)

çigjusa (冷たい・寒い) 体の部分で感じる「冷たい」と、体の全体で感じる「寒い」とを区別しない。

kunu mĩdʒi çigjusa (この水は冷たい)

kju: ja çigjusa (今日は寒い)

janagisa (きたない)

jugo: sa (かゆい)

jugo: sa: ti kakjui (かゆくて掻く)

dujassan (たやすい)

dujassan figutu (たやすい仕事)

kowasa: n figutu (難しい仕事)

kanafa (かわいい)

kanafa fun (かわいがる)

kʔimutʃagisa (かわいそう)

ho: rasigisa (ほこらしそう・楽しそう・うれしそう) 愛きょうのいい様子。

nītagīsa (不愛想の様子)

ʔatarafa (惜しい)

ku : tīnasa (忙しい) ku : tēnasa とも

いう。

Fuʃa (欲しい)

kantʃasa (食べたい)